

学校法人燿光学園名誉理事長、 認定こども園栃木幼稚園園長松下明世先生の 幼稚園教育の特質

はや かわ ふ み こ
早 川 富美子
(本 学 教 授)

お がわ す み え
小 川 澄 江
(本学名誉教授)

はじめに

1. 松下明世先生の「恩物」観
 - (1) 恩物とは
 - (2) 松下明世先生の玉成高等保育学校での学び、『教育課程』ノート
 - (3) 松下明世先生の恩物観
2. 保育内容としての暦—松下明世先生の玉成高等保育学校での学び
 - (1) 会集（朝の集会・お集まり）における暦の位置
 - (2) 幼稚園における暦の意義
 - (3) 松下明世先生の『暦』ノート
3. 松下明世先生の保育教材としての暦（カレンダー）の作成とその指導
 - (1) 松下明世先生の暦の作成
 - (2) 松下明世先生の暦の指導法

おわりに

はじめに

学校法人燿光学園栃木幼稚園、若葉幼稚園（平成 30・2018 年度より幼保連携型認定こども園）には昭和 43(1968) 年の國學院大學栃木短期大学初等教育学科開設以来、平成 24(2012) 年初等教育学科が改編され人間教育学科子ども教育フィールドになってからも 1 年生の「教育研修（幼稚園・小学校観察及び宿泊研修）」における観察園として、また 1、2 年生の幼稚園教育実習園としてご協力いただき、その都度学生や引率教員は、園長先生や担任の先生から幼稚園教育の神髄について学ばせていただいている。令和 7（2025）年 4 月に学校

法人燿光学園名誉理事長に就任された栃木幼稚園園長松下明世先生は、初代園長松下吉衛（1889～1987）先生の次女で、昭和30（1955）年代から令和7（2025）年の今日に至るまで70年の永きにわたり乳幼児保育は勿論、保護者の支援、教職員の研修や保育者・教育者を目指す若い人たちの指導に尽力され栃木県・栃木市の教育界に貢献されている。令和5（2023）年7月、本学人間教育学科子ども教育フィールドの講演会の講師を依頼した折には、「子どもから学ぶ」の演題の下、子どもたちを尊重し寄り添いよりよい成長を願う教育愛に満ちたお話と「たなばたさま」の合唱指導をいただき、そのしなやかなお姿に学生、教職員共に感動した。

以上のような経緯もあり、前稿「学校法人燿光学園理事長、栃木幼稚園園長松下明世先生の半生と『童心拝育』の保育の実践」（『國學院大學栃木短期大學紀要』第59号、令和7・2025年3月）においてはこの偉大なる明世先生の人間形成・幼稚園教育の実践を支えているものは何かについて考察し、それは幼少時の家庭環境、特に父私立栃木幼稚園・若葉幼稚園の創設者である松下吉衛先生のわが子に対する教育方針と父の幼稚園創設の理念「童心拝育」の後継者としての使命感、そして私立玉成高等保育学校における晩年のソフィア・アラベラ・アルウィン（Sophia Arabella Irwin）からの学びにあることが明らかになった。

ソフィア・アラベラ・アルウィンは、初代駐日ハワイ公使ロバート・ウォーカー・アルウィンと（武智）いきの長女として明治16（1883）年東京で生まれ、フレーベルの幼稚園理論やモンテッソーリ法について研究し、大正5（1916）年、東京麹町に玉成幼稚園、玉成保姆養成所を創設、わが国の保育者養成と幼稚園教育の発展に尽力した人物である。昭和17（1942）年に日本に帰化し、有院遍良と改名、昭和32（1957）年に死去している。

周知のとおり世界最初の幼稚園はドイツのフレーベルによって1840（天保11）年に設立された。わが国最初の幼稚園は、その36年後の明治9（1876）年11月16日に開園した東京女子師範学校附属幼稚園である。以後、幼稚園は全国各地に普及、明治20（1887）年代から30（1897）年代にかけては公立幼稚園数が私立幼稚園数を上回って設立されていたが、明治42（1909）年を境として私立幼稚園数が公立幼稚園数をしのぐようになる。中でも注目すべきことは、キリスト教系の幼稚園の発展が目覚ましかったことである。「キリスト教幼稚園のなかには、新しい試みをするものがあり、これがわが国のほかの幼稚園にも影響を与えている。このような外国人としてA・L・ハウ、N・B・ゲーンズ、S・A・アルウィン、M・M・クック、C・ドレイクその他の人々がいる。」「これらの人々は新しい教育方法を取り入れ、わが国の幼稚園に新風を吹きこんだが、同時にキリスト教的な規律をおもひこめる教育をしていた。このことはキリスト教幼稚園の教育方法の特色であるといえよう。」⁽¹⁾

と評価され、S・A・アルウィン即ちソフィア・アラベラ・アルウィン（以下アルウィンと呼称）は、幼児教育史の上では、わが国の幼稚園に「新しい教育方法を取り入れ、わが国の幼稚園に新風を吹きこんだが、同時にキリスト教的な規律をおもんじる教育をしていた」外国人の1人として位置づいている。大正5（1916）年アルウィンによって設立された玉成保母養成所はキリスト教的人間愛による温かい目と心を持った保育者養成を心掛け、「昭和前期を通じ、アルウィンの徹底したフレーベル精神とモンテッソーリ主義保育者養成の殿堂としてわが国幼児教育界に異彩を放ち続けたのである。」⁽²⁾と注目されている。

戦後昭和22（1947）年4月発足の新しい学校教育制度下では私立玉成保母養成所はアルウィン学園玉成高等保育学校として出発するが、アルウィンの徹底したフレーベル精神・恩物教育とモンテッソーリ主義による保育者養成の教育方針は変わらなかった。（アルウィン学園玉成高等保育学校は、昭和34（1959）年9月に学校法人アルウィン学園となり、昭和52（1977）年に玉成保育専門学校に改称される。）

松下明世先生は玉成高等保育学校に昭和29（1954）年4月に入学され、アルウィンから直接厳しい指導を受けている。松下明世先生は令和7（2025）年12月5日には百寿を迎えたが、今でも「アルウィン先生はとても厳しい先生でした。礼儀作法から保育の原理、恩物の指導に至るまで、人間として、幼稚園の先生として恥ずかしくないようにと教育していただきました。もうあのような先生はお出にならないでしょうね。」（令和7・2025年8月7日言）と、アルウィンを懐かしみ感謝している。松下明世先生はアルウィンからフレーベルの幼稚園教育の原理を学び、父吉衛先生から「子どもから学ぶ」保育、童心保育の教育（保育）理念を受け継いで実践をされてきた貴重な存在である。このような松下明世先生の子ども観、幼稚園教育観、そしてその実践からまだまだ学ぶべきことは多い。

松下明世先生は70年前に玉成高等保育学校で学ばれた時の『教育育課程（昭和30年度）』の授業ノート（図1）をお持ちである。ノートには「教育課程」「年案」「学期案」「週案」そして「日案」などが記されている。日案には「会集・恩物・工作・遊戯」の保育項目（課目）ごとにそれぞれの内容が記されている。松下明世先生の実践の基礎はこのノートにあると思われる。そこで本稿においては、第一に、この『教育育課程（昭和30年度）』ノートを手掛かりにして松下明世先生の玉成高等保育学校における学びについて、特にフレーベルの考案した遊具「恩物」について明世先生はどのように学ばれ、恩物の法則を理解し、実践の中に取り入れているのか考察を試みる。

次に松下明世先生の保育項目「会集」（朝の集会「お集まり」）における暦についての学びを考察する。先に見た明世先生の『教育育課程（昭和30年度）』の授業ノートの日案にお

ける保育4項目(課目)の筆頭は「会集」である。このことから明らかなように、アルウィンは幼稚園における保育内容の1つとして「会集(Morning Circle)」を取り入れた。幼稚園における「会集」は、異なった家庭環境に育ち、年齢や身体的にも精神的にも異なっている子どもたちの心身を統一して集団の中に溶け込ませ、人間社会のつながりを学ばせる場であるという。会集は「幼稚園の朝の時間に実施するプログラム」でその「順序は、一、奏楽 二、祈り 三、讃美歌 四、挨拶 五、暦 六、歌とリズム遊び 七、話」となっている⁽³⁾。

松下明世先生は玉成高等保育学校でアルウィンから暦についても厳しい指導を受けている。松下明世先生は70年前の学生時代に作成された「お話」⁽⁴⁾の原稿7点と4月から翌年3月までの(8月欠)1年間の『暦』ノート(図2)を保管されている。そこで第二の問題として、『暦』ノートを手掛かりにして松下明世先生のアルウィンからの暦に関する学びについて考察してみたい。

アルウィンから独特の暦の作成と指導法を学んだ松下明世先生は卒業後、栃木幼稚園において独自の「会集」を実践し暦を指導されていた。幼稚園の各クラスの暦(カレンダー)は、1年(度)365日或いは366日、4月から翌年3月までの12か月、1日から30日或いは31日の1か月の数字や日数、1週間の曜日、四季の概念だけでなく入園式、始業式等の園の行事や国民の祝日など、多くの要素を含んでいる。そこで第三の問題として松下明世先生が栃木幼稚園においてどのように暦を作成し会集の活動の中に取り入れていたのか、松下明世先生の回想から探してみたい。

なお本稿の執筆に関しては、松下明世先生から許可を受け、本学研究倫理委員会の承認を得ている。

1. 松下明世先生の「恩物」観

ある日栃木幼稚園に伺った時に松下明世先生(以下明世先生と呼称)が子どもの製作物を見せてくださった。それは色紙で作成した幾何学的模様の作品であった。そして説明して下さった。折り紙を折る時に子どもたちはまず右、左、角、へり(縁)、手前、向こう、などの言葉を覚えるので、教師はそれらの言葉を通して指導する。そこには恩物遊びの法則が使われている。「折り紙の角が手前と向こうなるように置きましょう。手前の角を向うの角に重ねると二等辺三角形ができます。」「楠の葉などを集めて洗い乾かして製作物の素材とした時に、素晴らしい中心模様の作品を作ったお子さんがいました。残念ながらその作品はお子さんに返してしまいました。」これらの言葉は恩物について学ばなければ出てこない。

明世先生は70年前に玉成高等保育学校で受けた授業の記録ノート『教育育課程（昭和30年度）』を見せてくださった。このノートから明世先生が恩物について深く学び恩物を理解し、意図をもって幼稚園の教育課程の中に積木、折り紙、切り紙等の遊びを取り入れようとしている意気込みが窺われる。そこで本節では『教育育課程（昭和30年度）』のノートを手掛かりにして、明世先生は恩物をどのように学び捉えているのか、明世先生の玉成高等保育学校での学びと恩物観について考察を試みてみたい。

（1）恩物とは

明世先生の恩物観を考察する前に恩物について触れておきたい。

周知のとおり幼稚園はドイツのフレーベル（Friedrich Fröbel 1782～1852）によって考案された。フレーベルの幼稚園の考案・命名の過程については先学によって優れた研究成果が示されている。岩崎次男氏によれば、フレーベルは幼稚園の創設に先立って子どもたちの遊びを發展させ創造性や協同性を開発するために「遊びと作業の用具」を考案し、Gabe（独語—贈り物・「恩物」）と名付けた⁽⁵⁾。

恩物とは何か、フレーベル研究の第一人者と称される莊司雅子は次のように記している。

「・・・フレーベルは何よりもまず児童の破壊衝動ではなく、実に神のような創造衝動や想像力の萌芽を立派に伸ばし、その完全な発達を助ける理想的な遊具の考案に努力した。そしてそのたぐいまれなる天才を傾けて製作した遊具が恩物である。恩物とはいうまでもなく神より授かった恩賜物のことである。」⁽⁶⁾

「その遊具をとおして、児童は自然を知り自然の造物主すなわち神を知り、神を知ることによって自己を知ることができる。したがってその遊具はそれ自身のうちにまず自然界のいっさいの法則を象徴していなければならない。だからその遊具は神を知らせ宇宙を知らせるために神の賜える贈物である。そこでフレーベルはみずから考案した遊具を恩物とよんだ。」⁽⁷⁾

フレーベルの考案した「恩物」は子どもたちの創造性や協同性を開発するための単なる「遊びと作業の用具」ではないように思われる。「恩物（Gabe）という語は、自然に内在する法則を神の象徴と認め、その法則を理解する用具は即ち神の恩賜品であるという考えに基づく。」⁽⁸⁾という。その語は「神から賜った恩賜物」「神を知らせ宇宙を知らせるために神の賜える贈り物」という意味なのである。

フレーベルは1826（文政9）年『人間の教育』を著して万有在神論の考えを披歴している。万有在神論とは、「神は万物を超越して万物を支配し、また神は万物に内在して万物の

本質を形成して万物は神から現れ、やがて神へ帰ってゆく。』⁽⁹⁾という考え方である。フレーベルはこの考えから生命の合一の思想を発展させるのである。

それではなぜフレーベルが考案した遊具 Gabe を日本では「恩物」と称しているのだろうか。それはわが国最初の幼稚園創設と無関係なことではない。

Gabe を考案したフレーベルは 1840（天保 11）年 6 月バート・ブランケンブルクに「一般ドイツ幼稚園（Kindergarten）」を創立、12 月にはルードルシュタットとゲラに幼稚園が開設され、1841（天保 12）年からは幼稚園教育者養成講座が開催されて幼稚園教育はドイツ各地に普及していった。しかし、1851（嘉永 4）年「プロイセン政府が、『無神論』及び『社会主義』のレッテルを貼って、幼稚園を禁止する。』⁽¹⁰⁾翌 1852（嘉永 5）年にフレーベルは 72 歳で死去、誤解が解けてプロイセン政府が幼稚園禁止令を解除するのは 1860（万延元）年のことである。幼稚園は故国ドイツで禁止されたが、幼稚園思想は 1848（嘉永元）年に起こった民主主義革命運動、三月革命によって亡命したドイツ人によってアメリカやイギリスに渡りその地で発展を見ている。

ドイツで発祥した幼稚園はやがてアメリカから、或いはドイツからのルートを辿って明治初期にわが国にやって来るのである。明治初期には幼稚園に関する多数の外国書が導入・翻訳されてわが国幼稚園創設の機運を高めている。わが国最初の幼稚園として明治 9（1876）年 11 月 16 日に東京女子師範学校附属幼稚園が開園されたことは既に触れたが、東京女子師範学校附属幼稚園創設に際して大いに参考になったのがドイツ人アドルフ・ドウアイ（ダウエイ）著“The Kindergarten”である。この書は 1871（明治 4）年にアメリカで出版され、アメリカにおいて英語で話すフレーベル主義幼稚園の普及と啓蒙に重要な役割を果たしている。これまでの幼稚園はドイツ人のための独語で話す幼稚園であったからである。英語で書かれているこの書は東京女子師範学校の英語教師であった関信三によって訳され明治 9（1876）年 7 月『幼稚園記』と題して東京女子師範学校から出版される。関信三は同附属幼稚園の監事（園長）に就任する人物である。『幼稚園記』の中に、「フレベル氏ノ法制ニ於テ此物体教科ノ初課タル者ハ円球及ヒ方体物ノ第一第二恩物ヲ以テ成立セリ」⁽¹¹⁾という一文があり、「恩物」とは英語の「ギフト」gift の訳であることが示されている。関信三は明治 12（1879）年に「幼稚園法二十遊嬉」を著し、その「総論」において「布列別氏コノ二十種ノ園課ヲ遊嬉ト呼ビ、其遊嬉ニ使用スル器具ヲ恩物ト名ケ…」⁽¹²⁾と記して、フレーベルが 20 種類の「園課」（遊び・作業）を「遊嬉」と呼び、遊嬉に使用する「器具」を「恩物」と名付けたことを傍点を付して強調している。関信三は「衆多ノ幼稚ヲ一樂園ニ集合シ阿父阿母等ノ恩賜セシ玩弄物ヲ以テ自由ニ歛遊嬉戯セシム」⁽¹²⁾と述べているので、「恩

物」という語を「父母の恩賜の義」⁽¹³⁾ から採用したものである。

「・・・一種ノ新教育法ヲ制定シ即チ衆多ノ幼稚ヲ^{パラダイス}樂園中ニ集合シ阿父阿母等ノ恩賜セシ玩弄物ヲ以テ自由ニ歛遊嬉戯セシムノ意ヲ表スルナリ 而シテ其歛遊嬉戯ニ因テ一大緊要ナル目的ヲ間接ニ養成スルヲ本旨トス 以テ二十恩物固ヨリ偶然ニ設クルモノニ非ス^{ふれべる}布列別氏ノ卓絶タル理学上ノ智識ト且ツ多年ノ實際経験トラ以テ組成セシモノニシテ各種ノ恩物ニ多少ノ旨意ヲ含有セリ・・・」⁽¹⁴⁾

以後わが国ではフレーベルの考案した遊具（Gabe・gift）を「恩物」と称することになったが、幼稚園の保育内容、方法としてもこの言葉が使用される。

『幼稚園法二十遊嬉』には、「総論」に「自然ノ法理」に基づいてその「順序」は「初二最モ簡単ナル円球ヲ列ネ漸次ニ精巧ナル技工ニ推入シ終ニ園課ノ最モ高尚ナル粘土模型ヲ設ルモノ是レ自然ノ法理ニ根拠セシ所ナリ」と記されているように、簡単な球を連ねる「第一恩物六球法」から高度な粘土模型の「第二十恩物模型法」まで、頁（丁表・裏）ごとに各種恩物の説明と保育目的、作業方法が記され、1人の幼児が碁盤格子の机上（恩物机）⁽¹⁵⁾で1セットの恩物を使用して作業をしている姿が描かれている。

恩物は東京女子師範学校附属幼稚園においては監事関信三やドイツ人でフレーベルの幼稚園法を学んでいたといわれる主任保姆松野クララ、保姆豊田^{ふゆ}英雄などによって保育内容として取り扱われた。豊田英雄は在任中に折に触れて書き留めたものをまとめ、「保育の栞」として残している。恩物については次のように記されている。

「偕^きて幼き児女を開誘するには恩物と名づくる所の各種の玩具あり、抑も此の玩具は西暦千八百三十年時代に当り独逸国にヒイデリツクフレーベル氏なる教育家現れ出で、種々学問の蘊奥を究め遂に幼児の教育法を発明したり。此の人夫婦にて多年辛苦実験を積み、矢張人生身心の發育も彼の草木發生の理に等しき原則を悟り遂に児女を開誘するに人生必須の様を含蓄したる二十有種類の実に小児に適当したる玩具を製し、併せて賢き遊戯を組み立て、幼児をして自ら之を使用せしめて身自ら之を導きて小兒天稟の良智良能を開誘し、其健康を助けしむる基礎とせり。此の二十玩具を名づけて恩物とは云へり。／ 恩物とは天賜と言ふ意を含有す。」⁽¹⁶⁾

ここに記されていることから豊田英雄は恩物について次のように理解している。

幼児の知識や才能を開発するために恩物といわれる玩具がある。この玩具は1830年代にフレーベルという教育家が現われ、学問の蘊奥を究めて幼児教育法を発見し、夫婦で多年実験を積んだ。そして人間の心身の發育も草木の生長も同じ原則に従っていることを悟り、幼児の発達にとって必須なものを含んでいる二十有種の玩具を製作し、併せて遊戯の方法

を組み立てた。幼児にこの玩具を使わせて、幼児自ら遊びを組み立てその天性や才能、能力、良心等を開発し、健康を養うための基礎としたのである。この二十の玩具を名付けて恩物という。恩物とは天より賜ったものという意味を含んでいる。

創設当時の東京女子師範学校附属幼稚園においては、フレーベルの恩物を研究しその意図を理解して各々の子どもたちに1セットの恩物を与えて作業をさせていたものと思われる。

しかしキリスト教と関わるフレーベルの思想や恩物の取り扱い方が煩瑣であるために関信三が明治13(1880年)に死去し、豊田英雄が明治12(1879)年に鹿児島女子師範学校附属幼稚園設立のために出向し、松野クララも明治14(1881)年ピアノ教授のために学習院に移った後の幼稚園保姆たちはその本質を理解できず箱からの出し入れも煩雑であり、次第に形式的に取り扱うことになる。他の幼稚園でも同じことで、恩物の形式的な取り扱いとは子どもたちも興味を示さず、幼児の自然の生活を尊重し自己充実するように導く誘導保育を提唱した倉橋惣三らによってその形式主義として批判され、明治後期から「恩物」は幼稚園教育から徐々に排除され、アルウィンによって設立された玉成幼稚園などの一部の幼稚園を除いて、恩物としての指導はなされなくなる。

大正15(1926)年に出された勅令「幼稚園令」並びに省令「幼稚園令施行規則」においては幼稚園の保育項目は「遊戯、唱歌、談話、手技等」となり、恩物は「手技」の中で取り扱われることが多かった。昭和2(1927)年4月改訂の「栃木幼稚園規則」⁽¹⁷⁾においても「第三条 保育科目は遊戯、唱歌、手工、談話、感覚練習、観察」と規定され、「その課程」は3歳児クラスでは「簡易なる唱歌、遊戯、模擬運動、談話、積木、摺紙、排方、画き方、貼紙、粘土細工を課し、その他容易なる感覚練習、自然観察をなさしむ。」と規定され、4歳児のクラスの「課程」は3歳児クラスの「課程」における「簡易なる唱歌」が「やや進みたる唱歌」に、「容易なる感覚練習」が「やや複雑なる感覚練習」に変わり「切紙、豆細工」が加わっている。5歳児では唱歌が「最も進みたる唱歌」に、「やや複雑なる感覚練習」が「感覚練習」になり、4歳児の「課程」に加えて「繡紙」が課されている。昭和初期の栃木幼稚園における「保育科目」「その課程」においても「恩物」という語は見られない。しかし、栃木幼稚園には玉成保姆養成所を卒業した青木保姆と塚谷保姆が在職しているので、2人の保姆はフレーベルの考案した積み木の恩物や、その他の手技工作としての摺紙、排方、画き方、貼紙、粘土細工、切紙、豆細工、繡紙などをアルウィンから学んだ方法で保育の中に取り入れていたものと思われる。撮影した年代は定かではないが栃木幼稚園には横に連ねた机の上に積み木の恩物を並べ、その背後に和服姿の園児たち一同と2人の保姆が写っている第一保育室の写真が残されているので、戦前にも恩物を取り入れていたことは確かなことである。

（２）松下明世先生の玉成高等保育学校での学び、『教育課程』ノート

幼稚園教育界から恩物が排除される歴史の中で、玉成高等保育学校（現玉成保育専門学校）、そして玉成幼稚園は「わが国幼児教育界に異彩を放ち続けた」と評価されているように恩物教育を続行している。

関信三が『幼稚園法二十遊嬉』を著して、二十恩物の目的や取り扱い方を紹介しているので、恩物は第一恩物から第二十恩物まで順序があると解されるが、岩崎次男氏は恩物について次のように述べている。

「フレーベルが考え出した恩物は第八の積木までであるということである。その後につづくいろいろの遊び道具を、もちろん、フレーベルは考えた。例えば、色板とか小箸とか豆細工とか粘土細工とか厚紙細工とか折紙、切り紙、織紙、刺紙とかを考えたが、それらにはきちんとナンバーをふらなかつた。そして『恩物』あるいは『遊びの恩物』（Spielgabe）と称されるのは第八までであつて、これらの恩物も後に挙げられたものもすべて含めて、『作業材料』（Beschäftigungsmittel）と称された。もちろん、第八恩物より後に挙げられたものをまとめて呼ぶ名称はつけられなかつたので、これを作業材料と呼ぶことにもなつた。恩物のナンバーがふえ、この作業材料に移っていくにつれて、だんだん年長の幼児や年少の学童が扱うべきものというふうと考えられた。／ところでフレーベルが亡くなった後、彼の弟子たちがそれらをきちんと整理し、二十恩物をつくり出した。」⁽¹⁸⁾

アルウィンは恩物研究の第一人者である。アルウィンはアメリカで学び、帰国後日本の幼稚園、保姆養成所を視察、更にドイツのフレーベル学園で恩物等を学び、その後イタリアに渡ってモンテッソーリからも学んで帰国、わが国幼稚園教育の先駆者である A.L. ハウの影響も受けている。アルウィンの長年に渡る恩物研究とその実践の成果は、『フレーベルの恩物の理論とその実際』（武政太郎監修、有院遍良校閲、玉成高等保育学校幼児保育研究会編）と題して、昭和 30（1955）年 9 月にフレーベル館から出版されている。本書は卒業生たちがアルウィンの講義内容を整理してまとめたもので、第一恩物から第十恩物までの恩物の説明とその「a 意義」「b 目的」「c 遊び方順序」「d 注意」事項が詳細に記され、さらに遊びの指導の具体例が掲載されている恩物指導の手引書でもある。

玉成高等保育学校幼児保(教)育研究会はアルウィンの昭和 32(1957)年の死去後も、フレーベルの恩物遊びを研究し、第一恩物から第十恩物までを「恩物」、第十一から二十までは「手技工作 (Occupations)」として扱い、昭和 51 (1976) 年に『フレーベルの恩物 (手技・工作編)』（アルウィン学園玉成高等保育学校）を出版している。昭和 30 (1955) 年に出された『フレーベルの恩物の理論とその実際』は版を重ねているが、平成 12 (2000) 年に現代の子どもた

ちに合わせた『フレーベルの恩物で遊ぼう』（玉成恩物研究会編著、フレーベル館）に改訂されている。

恩物の番号をいくつまでにするのか曖昧であるが、恩物と遊びは体系化されている。関信三の「幼稚園法二十遊嬉」を参考にとすると、第一恩物は、やわらかい毛糸でできている6色のボール、第二恩物は木製の球、立方体、円筒で、それぞれに紐をつけたり穴に棒を通して回転させたりできる。第三恩物から第六恩物までは全体では一つの立方体の積み木であるが小さな立方体・直方体・三角柱に分解できる。第七恩物は正方形・直角二等辺三角形・正三角形・直角不等辺三角形・鈍角三角形などの色板、第八恩物は長短5種類の本箸、第九恩物は大小2種類の鉄線の全環と半環、第十恩物は石盤、石筆、紙、鉛筆である⁽¹⁹⁾。

岩崎次男氏は恩物体系について次のように述べている。

「・・・恩物の体系は『単なる遊びたわむれ』（Spielerei）を排し、子どもたちの興味をひきおこしつつ創造的な遊びや作業を開発するために考案されたものにほかならなかった。それは『統一』と『対立』と『媒介』の諸法則にもとづいて立体→面→線→点へ、ふたたび点→線→面→立体へ、単純なものから複雑なものへ、基本的なものから応用的なものへ、象徴的なものから現実的なものへ、統一的なものから多様な分解と構成を可能にするものへと進むべきものとされ、子どもの心身の諸能力を段階的に発達させることを意図した。』⁽²⁰⁾

明世先生は玉成高等保育学校でアルウィンから直接恩物の指導を受け『教育課程（昭和30年度）』ノートを残している。このノートには幼稚園における教育課程の意義、作成の仕方、昭和30年度の年案、学期案、月案、週案、日案の実際、1日の時間割、「幼稚園保育様式」「幼稚園会集案様式」「幼稚園談話保育案」「幼稚園手技保育案様式（模倣製作の場合）」などが記されている。そこでこのノート手掛かりに明世先生の「恩物」の学びに焦点を当てて考察してみたい。

ノートを見ると、「恩物」は幼稚園の教育課程に基づく「日案」の中に組み込まれている。

ノートを開くと、まず「教育課程」、「A 前書き この教育課程は次の様なことを考慮に作られた」として教育課程を作成する意義が20箇条記されている。ちなみに幼稚園における「教育課程」とは端的に言えば、幼児の入園から卒園までの全体的計画のことである。この教育課程に基づいて年間指導計画、学期・月・週指導計画、そして日指導計画（日案）が作成される。

ノートに戻ると、次の頁には「B 基本方針」として教育課程作成の3つの方法が示され、その長所と短所が記されている。第一の方法は「子供の生活の中にあるポイントにすべてを結びつける方法」でこれを「中心統合的」と呼ぶこと、第二は「生活の中にあるものを

きっかけにしてそれから発展させる方針」でこれを「自由発展主義的」と呼ぶ。第三は「生活に於いて、問題になる事項を系統的に試みさせる方法」で「構作主義的」と呼び、それぞれの教育課程作成の長所と短所が箇条書きで記されている。

次の頁は「実例 昭和三十年代細目」で「a 年案 b 学期案 c 月案」が表示されている。縦軸は年案、学期案「第一学期、第二学期、第三学期」、月案「四月から翌年三月まで」の文字が並び、横軸には「目的 出発 到着」と記され、その下に内容が示されている。例えば、年案（縦軸）の横軸、目的は「愛の人」、出発は「自発」、到着は「実行」と記されている。学期案の第1学期（縦軸）の横軸、目的「協力」、出発は「毎日」、到着「団体生活になれる」とある。学期案としては2学期、3学期と続く。月案は4月から翌年3月までであり、4月は目的が「皆仲良く」、出発は「親切」、到着が「ゆずり合える」となっている。以下5月から翌年3月までの月案は省略する。

次の頁には「週案」が表になっている。縦軸は4月から翌年3月まで月ごとに第1週から第4週までの内容が、横軸「目的 出発 到着」の項目の下に記されている。4月は第2週から始まり、目的「今からお友達」、出発「御挨拶」、到着「手をつないで」、4月第3週は、目的「皆の幼稚園」、出発「歌いませう」、到着「うれしくなる」、4月第4週は、目的「独立」、出発「行って参ります」、到着「一人で来られる」と記されている。5月から翌年3月までの週案は省略する。

次に「日案」である。「日案」は、縦軸月曜日から土曜日まで、横軸「会集・恩物・工作・遊戯」の項目に分かれている。まず「四月第二週」の月曜日から土曜日までの日案の内容が「会集・恩物・工作・遊戯」の項目（課目）ごとに示されている。4月第2週の「会集」は月「童話」、火「お友達」、水「母と子 足をばたばた」、木「童話」、金「幼稚園」、土「童話」が内容になっている。「恩物」「工作」「遊戯」の項目は「小・中・大」に分かれて内容が記されている。これは年少児、年中児、年長児のクラスを意味している。

以下「四月第三週」、「四月第四週」と毎月、毎週「会集・恩物・工作・遊戯」の4項目（課目）の下に内容が記されている。ここでは「恩物」と「工作」の項目（課目）に焦点を当てて見ることにする。「恩物」の項目の内容を辿っていくと、「恩物 第一」から「恩物 第十」まで記されている。まずは「恩物」より先に「工作」の4、5月の内容を見てみると、4、5月は次のような内容が記されている。（6月以後は省略する。）

「折紙 風車」「折紙 ギッコンバタン」「折紙 西洋館」「折紙 風船」「折紙 傘」「自由画」「砂」「折紙 山」「粘土」「自然物つなぎ一つ一つ」「自然物つなぎ三つ二つ一つ」「自然物つなぎ簡単な律」「折紙 桃」「折紙 あやめ」「(材料、方法自由) 折紙 金太郎」「鯉

のぼり」「お柏餅」「ちまき」「厚紙のりもの」「かぶと」「三体つなぎ」「折紙 鯉」「折紙 風車」「自然物つなぎ」「切紙 続けて切るもの」「切紙 (はさみ練習)」「折紙 (金魚)」「フレーベルの切紙」「折紙 (亀)」「折紙 (ヨット)」「絵 (水彩)」「絵 形をうめる」「絵 原色三色」「折紙 (つばめ)」「切紙 (あじさい)」「折紙 (犬)」「切紙 (けしき)」「折紙 (バツタ)」「厚紙細工 (テーブル)」「絵 (横の線)」「厚紙 (かご)」「折紙 (風船)」「折紙 (兎)」「折紙 (美術式)」「切紙対象 鳥」「切紙対象 けもの」「折紙 (船)」「折紙 (宝船)」「豆細工」など。

目を引くのは12月の「工作」の内容である。12月は第2週からクリスマスまで小中大のクラス全て「クリスマス準備」となっている。2月の第4週から3月第1週にかけてはひな飾りの準備であろう。全クラスで「台と屏風を作る」「内裏雛 奥様」「ぼんぼり 桜と橘」を作ることになっている。

これらことから玉成高等保育学校では第一恩物から第十恩物までを「恩物」として扱い、「折り紙」「切り紙」「厚紙」「粘土」「自由画」「豆細工」などを「工作」の内容として扱っていることが理解できる。「工作」の内容も季節を配慮した計画であることは当然である。「工作」の時間には広い意味の恩物の番号「十一 穴をあける 十二 縫う 十三 描く 十四 組む、編む、織る 十五 紙を折る 十六 紙を切る、貼る 十七 豆細工 十八 厚紙細工 十九 砂遊び 二十 粘土いじり」⁽²¹⁾などの作業を行うのである。

さて、「恩物」をどのように扱うのか、「日案」の内容を見てみよう。第一恩物については、4月第2週(月)から(土)の小クラスでは、月「第一 ひもあり模倣(生物)」、火「第一 ひもなし模倣(生物)」、水「第一 色赤」、木「第一 色黄」、金「第一 色青」、土「第一 赤黄青復習」と記されている。中・大のクラスにおける4月第2週から第4週の日案には「第一恩物」は記されていない。第一恩物は主に小クラスの内容となっているのである。第一恩物の内容を見ると「色赤、色橙、色緑紫、数一つ、数二つ、数三つ、色復習、数四つ、方向上下、方向左右、方向前後、数復習、球の紹介、模倣球、ひもあり模倣、方向向う手前、ひもあり活動遊戯、数六つ」、などと表されている。

この日案から第一恩物について理解できることは、その扱い方も多種多様であり、球の形、色(単色か2色のボール・3色のボールを扱うか)、数(1つ、2つ、3つ〜6つ取り扱うか)、振る方向(上下・左右・前後・向こう手前)などの認識や触感、動物の動きを想像してまねるなどの多様な能力を育成することができることである。明世先生が玉成高等保育学校で恩物についてどのように学んだのかは、伝記編集委員会編『荒野に水は湧きて―ベラ・アルウィンの生涯』が大きな示唆を与えてくれる。第一恩物については次のように記されている。

「私たちは、入学すると間もなく、直径六センチ六色（赤、黄、青、橙、緑、紫）の毛糸のまりをもって、ブルーランブルーランピョンピョンと振ったりはねたりさせて、生後間もない幼児のための遊びの指導を受けたのである。／これこそがフレーベルの言う自発活動教育の初めであって幼児の中に秘められた諸活動能力を開発促進させる一歩だったのである。やがて握ったり放したり、受けたりして感覚と諸機能の活発な活動により、物を認識して自他を知り、自分の世界を広めていくのであると。こうして六色のまりは数、色、方向を知るための遊びであると導いて下さった。」⁽²²⁾

「第一恩物 幼児の手に把握できる大きさの（直径約六^{センチ}）やわらかき六色のまり（現在は毛糸にて包む）三原色の赤、黄、青と三補色の橙、緑、紫……これには、ひも付きと、ひもなしとある。」⁽²³⁾

明世先生のノートに記されている第一恩物の内容「ひもあり模倣（生物）」、「第一 ひもなし模倣（生物）」等がどのような遊びでどのように指導するのか『フレーベルの恩物の理論とその実際』の「c 遊び方順序」の項目において具体的に説明されている。その詳細については省略する。

明世先生の「日案」における第二恩物の扱い方を見てみよう。

4月第4週水「小 第二 球紹介」、木「中 第二 箱入三体」、5月第1週月「中 第二 廻転円筒立方体」、木「小 第二模倣遊戯球」、土「小 第二円筒の紹介」、5月第2週木「小 第二模倣円筒」、5月第3週月「小 第二模倣円筒」、火「小 第二模倣立方体」、5月第4週月「中 第二連絡遊戯」、火「小 第二回転球円筒」、水「小 第二円筒模倣」、木「小 第二立方体実物模倣」、金「小 箱入三体模倣」、土「小 三体の面の紹介」、6月第1週金「中 第二箱入三体」、土「小 第二回転円筒みえるもの」

以上のような内容になっている。ちなみに第二恩物は「直径六^{センチ}の木製の球、底面の直径六^{センチ}、高さ六^{センチ}の円筒、一稜六^{センチ}の立方体がそれぞれ一個ずつ入っている箱入三体……糸を各体につけ箱を利用して回転遊びもできる。」⁽²³⁾ のである。球、円筒、立方体の「三体はあらゆる形態の基本として示される」という。

明世先生のノート、3月までの中、大クラスの「日案」には、更に第三恩物から第十恩物までの内容も記されている。

アルウィンは第三恩物の8個の積み木など、指を巧みに動かして分割したり統合したりして子どもの心理に適切な遊びを次々とやって見せ、授業が終わると生徒一人ひとりに実習をさせたという⁽²⁴⁾。

明世先生は次のように述べている。

「アルウィン先生はとにかく厳しかった。製作物を先生に見ていただくのであるが色使い、図の配置など、出来栄が十分でないと『もう一度お考えなさいま』とおっしゃって、何度も何度も指導して下さった」(令和7年8月7日の言)。

このことから明世先生は恩物の体系とその意図、扱い方をしっかり学んでいることは明らかである。

明世先生のノートには「日案」の次に「時間割」として「三時間保育」(9時～12時)「四時間保育」(9時～1時)「五時間保育」(9時～2時)が記され、それぞれa案b案の二種類が計画されている。細目を見るとどの案にも会集、恩物、自由遊びが入り、その他は遊戯、自由手技、工作、ゲームス、おべんとう、ひるね、音楽鑑賞又は観察、人形劇・音楽鑑賞、帰る支度、などが記入されている。

昭和22(1947)年、勅令「幼稚園令」は廃止され、幼稚園は学校教育法の中に位置づいた。昭和23(1948)年文部省から試案「保育要領—幼児教育の手引」が出されて幼稚園の保育内容として12項目示されていたが、各幼稚園の裁量に任されていたのである。ちなみに「保育要領—幼児教育の手引」は昭和31(1956)年全面的に改訂「幼稚園教育要領」として公示され、保育内容に関しては6領域に体系化された。「幼稚園教育要領」が文部省告示になるのは昭和39(1964)年改訂版からである。平成元(1989)年改訂の「幼稚園教育要領」から保育内容は5領域になっている。

(3) 松下明世先生の恩物観

明世先生の『教育課程』ノートから先生は玉成高等保育学校においてフレーベルの意図した恩物の意義や目的、取り扱い方など、アルウィン先生を通して詳細に学んでいることが明らかになった。栃木幼稚園には箱入り恩物のセットが保管されている。(図3) 明世先生によれば、蓋は滑らせて開けて、蓋の上に中の恩物を置くなど、恩物の出し入れにも法則がある⁽²⁵⁾。使用後は法則に従って箱に収め一つでも紛失しないようにしなければならない。恩物は精巧にできており、竹の恩物など子どもがけがをしないように繊細に作成されている。販売の会社も限られていてとても高価であったため、1クラス30人分の第一から第十の恩物のセットを購入するのは難しく、安価なボール紙の色板などを用いたこともあったという。

明世先生が恩物に触れている講話がある。昭和61(1986)年6月の國學院大學栃木短期大学初等教育学科の夏期教育研修における「幼稚園観察」の折、明世先生は若葉幼稚園副園長として若葉幼稚園の園舎に込めた2つの意図について学生たちに次のように語っている。

「ここを建てます時に、どうせ建てるならということで考えたのは、・・・おうちの子ども部屋の延長の様な、そういう気持ちで通ってもらえたらいいなと考えたのがこの設計なのです。あそこに橋がありますけれど、橋はだいたい十メートル。その橋の横に一寸かがんで眺めたとしますと、この園舎というのがこういうね、これは何かと言ったら、この手というのは、子どもを育む手であり、ですから教育者の手である。そして教育者の手で守られて本当にすくすくと育つ子どもをこの手の中に、燦々と太陽が輝き、自然の恵みを受け、それから雨の恵みも受け、爽やかな風も受け、嵐も受けそういう自然の中で子ども達に育って欲しいというふうな願いで建てられたのがこの建物なんです。(中略)

ここを建てた時にやはりこういう配置とか考えましたし、もう一つ考えたのが、やはり子ども達を包み込む木造の暖かさというのが欲しかったのと、それから仕組みとか、こういうデザインとか柱とか桁とか天井も低くなっている。普通はあのフレーベルの、これから皆さん学んでいくと思うんですけどね。幼稚園教育者なんですが、その方は、自分が鉱物学者で大変敬虔なキリスト教信者で、クリスチャンで、自分が考えたのに、『それは神の啓示で神様が自分を通して考えさせてくれた』という考えで、『恩物』というおもちゃは、十の物ともう一つ二十あるんですけども、その中にね、建築恩物というのがあるんです。それは、四、五、六が『建築恩物』なんです。その中に本当に土台作りはとても大切だという、まあおもちゃですね。だからそれを積み上げていっても、初めに土台がしっかりしてないとガチャガチャと崩れていく。遊びながらそれを学ぶわけで、こうなってああなって出来上がっていく。そういうところからの発想で、こういうふうにはいいか悪いかわからないが、まあいいと思って造ったのがこういうふうなことなんです。それと一寸天井が低いところがあるでしょ。あんまり高いと子ども達は不安を感じるっていうか、安定した気持ちにならないので、ところどころ低い所がありますね。そういうことで建てられたのがこの園舎なんです。」⁽²⁶⁾

昭和 61(1986)年頃の若葉幼稚園の園舎は昭和 54(1979)年 4 月に新築された旧園舎であった。(幼保連携型認定こども園若葉幼稚園は平成 30〔2018〕年度から新園舎(図 4)になっている。)明世先生は、この時おそらく園庭を囲む園舎の配置を掌に見立てて手を開いて示し、園庭で遊ぶ子どもたちを周囲から見守る園舎、また木の温かさで子どもたちを包み込む木造建築の園舎にした事由を語っているであろう。その園舎はフレーベルの建築恩物の遊びの土台作りの発想から建てられているというのである。ここで注目されることはフレーベルは「鉱物学者で大変敬虔なキリスト教信者で、クリスチャンで、自分が考えたのに、『それは神の啓示で神様が自分を通して考えさせてくれた』」という言葉である。明世先生

はフレーベルの恩物とフレーベルが鉱物学者で敬虔なキリスト教信者あったことを結びつけて認識している。

フレーベルは1782（天明2）年ドイツのオーバーワイスバッハで生まれその生涯は波乱に満ちている。向学心に富み1799（寛政11）年10月にはイエナ大学哲学部に入学、1805（文化2）年23歳の時にはイヴェルドンにペスタロッcherを訪ねている。その後模範学校の教師やフランクフルトのホルツハウゼン家の家庭教師になり、1808（文化5）年にホルツハウゼン家の男児3人を連れて再度ペスタロッcherを訪問、2年間滞在している。1811（文化8）年にはゲッチンゲン大学に入学している⁽²⁷⁾。

フレーベルは確かに鉱物学にも興味を持っていた。

「鉱物の世界や結晶の世界には特に整然たる法則が支配していた」ので、フレーベルの興味は語学の研究から自然の研究、とりわけ鉱物学・結晶学の研究に移っていった。1812（文化9）年10月フレーベルはゲッチンゲン大学を去ってベルリン大学に入学して結晶学の権威ワイズ教授の下で鉱物・地球構造学・物理学などを研究し⁽²⁸⁾、結晶の法則の認識を通じて「生命の合一」の思想を発展させている。「生命の合一」の思想とは「個々の被造物の中には神の精神が生き、唯一の根源力の一部が働いている。すなわち生命なき水晶のような鉱物から生命ある人間にいたるまでこのような同じ精神、同じ一つの根源力が働いている。もちろんその精神の明瞭性と完全性とはさまざまな段階はある。ゆえにもし人間がこれを熟慮し予感するならば、かれもまたあらゆる被造物すなわち全自然と共に同じ一つのものに帰することを感ずるであろう」⁽²⁹⁾ いう考え方である。フレーベルは「人間と人間との合一、人間と自然との調和及び人間と神との一体（信仰）」⁽³⁰⁾を求めていたのである。

1813（文化10）年4月フレーベルはベルリン大学を去り、義勇軍に参加、その後1814（文化11）年8月ベルリン大学鉱物館の助手兼管理人となるが、1816（文化13）年4月退職している⁽³¹⁾。

明世先生がフレーベルは「鉱物学者」であったと認識しているのは、フレーベルの生涯や教育思想についても深く学んでいるからだろう。

明世先生の講話記録に戻ると、明世先生は「『恩物』というおもちゃは、十の物ともう一つ二十あるんですけれども、その中にね、建築恩物というのがあるんです。それは、四、五、六が『建築恩物』なんです。」とまさしく恩物について語っている。

明世先生は十の恩物ともう一つある十の恩物、即ち恩物は全部で20あり、その中の四、五、六の恩物が「建築恩物」でフレーベルの「建築恩物」というおもちゃは土台がしっかりとっていないとその上に積み上げていっても崩れてしまう。若葉幼稚園の園舎の造りを語りな

がらも建築恩物の遊びを通して学んでいく子どもたちについて語っているのである。

四、五、六の建築恩物の学びについて探ってみよう。『荒野に水は湧きてーベラ・アルウィンの生涯ー』には次のように記されている。

「四、五、六の恩物は一定の形と数が定められ、正しい認識の許に知的、生活的、美術的遊びへと進展し幼児は新しい世界を見出し、楽しい生活へと育まれていくのである。一方これらの遊びは全体と部分という社会性すなわち個の完成と調和の大切な基本を教えようとしているのである。それゆえ各恩物は一つずつ、箱にきちんと収められ、いかなる遊びも常に個々が全部用いられなければならないとするのである。」(297 頁)

第四恩物は、8 個の小さな長方体（直方体）積み木が組み合わされた立方体である。第五恩物は、27 個の部分立方体積み木から構成されている立方体であるが、これらの部分立方体のうち 3 個は 1 つの対角線で分割された 6 個の三角柱で、更に 3 個は 2 つの対角線で分割された 12 個の三角柱である。第六恩物は 36 個の積み木からなる立方体で、それは 18 個の長方体、12 個の立方体及び 6 個の角柱からなっている。ちなみに第三恩物は、8 個の小さな立方体積み木から構成される立方体である。これら第三恩物から第六恩物は第二恩物の立方体の分割から作られる積み木で構成されている。即ち全体の形は 1 つの立方体であるが、その立方体は小さな立方体、長方体（直方体）、三角柱の積み木で構成されているのである。これらの積み木の恩物によって「生活あるいは建築の形」（身のまわりで生活上使用されているいろいろなものを表現する）、「認識あるいは学習の形」（主として数の認識を得させるものを表現する）、「美あるいは絵の形」（いろいろな幾何学的な図形や模様を表現する）を構成させ、子どもの四肢、身体、感覚、知性、感情、意志の調和的な発達を図るよう工夫されているという⁽³²⁾。

「四、五、六の建築恩物」についてどのように扱うのか、明世先生の『教育課程』ノートの日案の「会集・恩物・工作・遊戯」の 4 項目の中の「恩物」の項目に記されている恩物番号「第四」「第五」「第六」を見てみる。

第四恩物—「建築」「長方体の研究」「中心模様（中心の動かぬもの）」「中心模様」「三、四連合建築」「切り方」「連絡あるもの」「知的長方形の研究」「空席の研究」「長方体・面の比較」「立方体と長方体比較」「部分の紹介」「五、四の比較」

第五恩物—「建築」「五、六連合建築」「全部の面の比較」「上部建築」「知的三角形」「 $\frac{1}{3}$ 建築」「第五第三との比較」「五、四の比較」「切り方」「大三角柱のみ」「小三角柱のみ」「美術的中心模様」「三角柱の研究」

第六恩物—「建築」「紹介」「切り方」「五、六の比較」「うけの紹介」「 $\frac{1}{3}$ 建築」

これらの恩物に関する内容、言葉は専門的に学んでいなければ、理解できないし、指導もできない。建築恩物だけでなく恩物全般に関して言えることは恩物遊びを教育課程、保育内容に導入するためには、専門的な訓練が必要不可欠である。これらの内容がどのような遊びであるのかは、玉成高等保育学校幼児保育研究会編『フレーベルの恩物の理論とその実際』が大きな示唆を与えてくれる。これらの内容の取り扱い方の詳細については省略する。再三述べるが、明世先生は恩物の扱い方についてもアルウィンから厳しい訓練を受けてきたのである。

明世先生は玉成高等保育学校で学ばれたことを基礎に栃木幼稚園・若葉幼稚園で長年保育に携わっている。恩物の究極のねらいは、遊びを通じて創造性を開発することと、協同して遊ぶ協同性を育成することであるといわれる。これはまさしく栃木幼稚園・若葉幼稚園の創設者松下吉衛先生が目指した栃木幼稚園、若葉幼稚園の教（保）育目標「創造性」（元氣）、「調和性」（なかよし）に他ならない。このことから松下吉衛、明世先生親子がアルウィンの教育信念に賛同し敬意を払っていることが窺える。

明世先生は現在においても恩物を幼稚園教育に取り入れるべきだと次のようにおっしゃっている。

フレーベルは偉大である。鉱物学者であったので鉱物の結晶の観察から多様な形を見出し、恩物の積み木を幾何学的模様に変化させることを考え付いたのではなかろうか。恩物はあくまでも遊びである、子どもが興味を示し、自らやってみようという意欲を持たせることが肝要ある。子どもたちは遊びを通して恩物には一連の流れがあり法則があることを発見し、繰り返し繰り返し行うことによって言葉を覚え、数を認識して創造性や知的能力、感覚を発達させることができるのである。

例えば折り紙を折る時に使われる言葉、かど、へり、向こう、手前、右、左、角は幾つあるか、角を数える時は右から数える。中心、中心模様、2つの中心模様、反復、対称、これらの言葉を子どもたちは作業をしながら楽しみながら覚える。教え込むのではない。時にはピアノの音を使って遊びを通して方向を知らせることもある。教師は子どもの位置に配慮し、曖昧な言葉ではなく、正確な言葉を掛けなければならない。アルウィン先生は常に敬語を使われていた。日本語は曖昧であると言われた。黒板を使用して教師が師範を示す場合、黒板の上、下が、子どもたちの机上の作業においては、机は平面であるので「向こう」「手前」になる。

「これをこうやりましょう。」ではなく、「角が向うと手前に来るように置きましょう。」

と言葉を掛ける。言葉や方向を覚え慣れてくると教師が師範を示さなくても教師の言葉の指示で子どもたちは折り紙を折ることができるようになる。はさみ使って工夫しながらどんどん作品を作れるようになり、知的能力も発達し手先も器用になる。

色板の第七恩物は正方形、正三角形、直角二等辺三角形、直角不等辺三角形、鈍角二等辺三角形の異なった形の色板からなるが、年少児には先ず1種類の色板を渡して作業をさせる。徐々に板の種類を増やし年中、年長になると多くの色板を使って連続模様や中心模様など複雑な模様を作ることができるようになる。

教師は感性が大切で季節の移り変わり、草や木、種子などを良く観察して、子どもたちに興味を持たせ、自然物を素材にして作品を作る時にもフレーベルの恩物の法則を利用する。

「手前に一番長いへりを置きましょう。」と言うと子どもたちは素材の中から「長い、長い」と言いながら探す。「葉を左に葉柄を右に置きましょう。」と言うと、そのお通りに置きどんどん作業を進めていく。恩物の方向付けの法則を取り入れ、遊びながら、楽しみながら言葉を掛けると子どもたちは喜んで作業に取り掛かるのである。積み木や木の葉、木の実などの自然物、折り紙や切り紙を素材にする時にも、恩物からの発想、恩物の法則を基礎にして遊びとして指導すると、子どもたちは幾何学的な中心模様（素材が中心から四方八方に広がる模様）や連続模様などの素晴らしい作品を作ることができる。

明世先生は子どもたちばかりではなく、栃木幼稚園・若葉幼稚園の教師たちにも恩物の法則や取り扱い方を指導されている。今日でも栃木幼稚園・若葉幼稚園においては折り紙や自然物を教材にする場合フレーベルの恩物の法則や取り扱い方の原則を生かした活動がなされている。(図5)

2. 保育内容としての暦—松下明世先生の玉成高等保育学校での学び

大部分の幼稚園の保育室において、毎朝主活動に入る前に、朝の挨拶が交され、今日は何月何日何曜日であるかを確認することがなされている。それは何のために行っているのでしょうか。明世先生はアルウィン先生から人間の発達にとって暦が大切であることを学んでいる。そこで本節では明世先生の暦に関する学びについて考察してみたい。

(1) 会集（朝の集会・お集まり）における暦の位置

アルウィンは暦を朝行う一連のサークルの中に取り入れている。アルウィンが保育内容の1つとした「幼稚園の朝のサークル」⁽³³⁾とは「会集（Morning Circle）」の時間に行う一連のプログラムのことで、「会集は、朝、幼稚園に登園してくる幼児を、適当な一定の時

間をきめて全園児と全教師が一つの場所に集まって、目的を持って行なう、カリキュラム展開の場である。」「その内容は幼稚園の朝の時間に実施するプログラムである。プログラムの順序は、一、奏楽 二、祈り 三、讃美歌 四、挨拶 五、暦 六、歌とリズム遊び 七、話 となっている。」⁽³⁴⁾

「静かな朝の時間を全員が^{ひとつ}一処に集まり、まず美しい音楽を聞き(奏楽)、静かに祈り(祈り)、神を讃美し(讃美歌)、お互いの無事を喜び、お互いの存在を認め合い(挨拶)、今日という現実の時の中に全員が社会生活をしていることの確認(暦)、大好きな歌をみなといっしょに歌ったり手や足や身体を充分に伸ばしたり動かしたりしてリズムに合わせて踊る(歌とリズム遊び)、いろいろな観察をしたり、ハミリ映画を見たり、お互いに話をし、話を聞き、言葉を覚え、面白い様々な事柄やお話の世界を知ること(話)、それが会集のプログラムである。」⁽³⁵⁾

暦は幼稚園の朝のサークル「会集」の中に位置づいているのである。

明世先生の『教育課程』の授業ノートに記されている「日案」の保育項目が「会集、恩物、工作、遊戯」の4項目であったことは既に触れた。「日案」の「会集」の項目に記されている内容、ここでは4月の第3週の内容を見ると、月「童話」、火「木の芽」、水「童話」、木「桜」、金「母と子 おしまい」、土「童話」と記されている。ここに記されている「童話」「木の芽」などは「会集」のプログラムの「七、話」のテーマを示しているものと思われる。「会集」は単なる全員集合の時間ではない。幼稚園における会集のプログラムには順序があり、それぞれ意味があることに興味を惹かれる。

ところで「会集」という言葉は、明治10(1877)年撰定の「東京女子師範学校附属幼稚園規則」の保育時間表の中に、3歳児4歳児5歳児の各組で月曜から土曜日まで毎朝30分間行う「室内会集」として見られる⁽³⁶⁾。この規則は明治17(1884)年に改正され、「会集」は「会集

修身ノ話 庶物ノ話 木ノ積立 板排へ・・・」等々、20の「保育科目」⁽³⁷⁾の筆頭に位置づき、次のように規定されている。

「一 会集 会集ハ毎日先ツ諸組ノ幼児ヲ遊戯室ニ集メ唱歌ヲ復習セシメ且時々行儀ニ就テ訓悔(戒)ヲ加フルモノトス。」⁽³⁸⁾

この規則によれば「会集」は毎朝全クラスの幼児を遊戯室に集めて唱歌を繰り返して歌い、時々行儀について教えさす時間である。明治17(1884)年ごろから「会集」を保育科目・保育内容に取り入れる幼稚園が増加するが戦後この言葉は徐々に使用されなくなり、替わって「朝の集会」「お集まり」というようになっている。アルウィン戦後においても「会集」を保育内容の1つとして重要視し、次のように説いたという。

「朝のサークルは、一貫した合目的教育、例えば四季の移りかわりに即した保育、社会のその時々のできごとに即した保育、ある時は年長の子どもを中心に、ある時は年少の子どもを中心に、つねに生き活きと積極的に、前進的に、けっしてマンネリズムに陥らないで、豊富な内容、深い教養を持ったスケジュールで実行されなければならないと、」⁽³⁹⁾そして「会集全体の時間」についても全園児が一緒に行う場合は「年少の組の子どもを基準」にするようにと注意したという。

（２）幼稚園における暦（カレンダー）の意義

人間が人間として生活するためには暦の観念を持たなければならない。暦とは「1日を単位として長い時間を年・月・日によって数える体系。それを構成する方法（暦法）またはそれを記載したもの（暦表、暦書）をいうこともある。」⁽⁴⁰⁾ 暦といえば「^{かよみ}（日読の意）一年中の月・日・曜日、祝祭日、季節、日出・日没、月の満ち欠け、日食・月食、また主要な故事・行事などを日を追って記載したもの。カレンダー」（広辞苑）をイメージする。今日が何月何日何曜日であるのか、昨日、今日、そして明日の日にちがわかり、曜日、節気（季節）、国民の祝日等が記載されているカレンダー、予定を書き込むことができるカレンダーは社会生活と直結し、明日を、1年を、一生を、将来を見通して社会生活を送っていくためにはなくてはならない必需品である。

『荒野に水は湧きてーベラ・アルウィン生涯ー』にアルウィンが暦を朝の会集に取り入れた意図が次のように記されている。

「人間の社会、人間の歴史、人間の生命と切り離すことのできない『時間』というものの、『時』というものの観念を養うために幼稚園の朝のサークルに、アルウィン先生は暦を取り入れた。／子どもに、今日という日や『今』という時間『明日』という日、昨日という日、（過去、現在、未来）を教え、自分と外界……、自然界、社会……との相対的な関連を考えさせる教材として、アルウィン先生は暦を活用したのである。一日、一週間、一ヶ月、一年、そして日本のように季節感の豊富な国では、春、夏、秋、冬の四季の移り変りに目を開かせ、注意を呼び^{さま}魅して、自分とのかかわりを知らせてゆこうとしたのである。」（318頁）

人間は時の流れの中に生きている。その時間を可視化するのが時計であり、太陽や月の運行であり暦（カレンダー）である。アルウィンはそのことに着目し、幼稚園の朝の日課として昨日に続く今日という日に皆が出会えたことを喜び、神に感謝し祈り、時の流れの中で共に社会生活をして成長していくことを子どもたちに認識させるために暦を取り入れたのである。この着眼点には驚嘆する。

現在の幼稚園では、子どもたちが登園して自由に遊んだ後、主活動に入る前に各保育室で、時には全園児、全教師が園庭または遊戯室に集合して、朝の集会を行っている。その内容は挨拶、点呼、暦（今日の日いち、曜日等の確認）、お話、歌を歌いダンスをするなどの日課である。朝の集会はクラスの子どもたちと教師が朝の新鮮な雰囲気の中で互いの存在を確認し合い、今日が何月何日、何曜日であるのか、また今日は何の日であるのかを共有し、歌を歌い教師や友達と言葉を交わし、興味や関心、見通しをもって楽しく一日を過ごすことができるようにする時間である。

幼稚園において暦（カレンダー）は今日の日いち、曜日等の確認に使用されるだけではない。子どもたちにとって1年は12か月あり、月や曜日の呼称、日数、日いち（日付け）の呼称や数え方、また季節の特徴、誕生日、園の行事、国民の祝日等を暦と関連付けて学ぶ機会でもある。多くの幼稚園では保育室の壁面にクラスの子どもたち全員の誕生日を記した掲示物がある。子どもたちは自分の誕生日が12か月のどこに位置しているのかを知り、誕生日が来ると1つ大きくなることを認識する。また友達の誕生日も知ることができ、友達と一緒に祝う「誕生会」を楽しみに待っている。暦（カレンダー）を通して誕生会や遠足など、多くの行事を月日や季節と関連づけて期待をもって迎えることもできる。

（3）松下明世先生の「暦」ノート

明世先生は70年前、玉成高等保育学校で作成した『暦』ノートを保管されている。既に考察したように、「暦」は「会集」のプログラムの中に位置づいている。アルウィン先生は暦の指導においても徹底していた。「以上のようなことを学ばなければ、保育者の資格はないと言われて生徒に実行させた。」⁽⁴¹⁾のである。学ばなければならない「以上のようなこと」とは何か、それは暦の成立から歴史、種類、季節を示す二十四節気について、また行事の研究など、多岐にわたっている。

一、暦の成立の研究

二、太陽と地球の関係（これは太陽系とそこにある星のことに就いてすべて）

三、世界に現存する暦の種類を調べよ。これは太陽暦、太陰暦を問はずである。

四、暦の発達の歴史……太陰暦から現在のグレゴリオ太陽暦、さらには世界暦（学術用）までのこと。

五、日本の国の時刻の変遷の研究。

六、現在の日本の暦の実際……二十四節気について、また日本の国定祝日、宗教関係の日、年中行事などの詳細な研究などである⁽⁴²⁾。

そして「幼稚園の暦は必ず教師の手で作らなければならないと力説」し、作成上の留意点も「厳しく教えた」という。明世先生も「アルウィン先生の教えは本当に厳しかった」と仰っている。

「幼児の程度を考え、数の観念の発達を念頭におきながら、幼児の程度にふさわしいものを製作して与えなければならない。ある時は組の幼児と合作して作ってもよい。季節感と合致した題材で子どもの喜ぶもの、興味あるものを使って毎日毎日新しい感じで暦と相対するようにマンネリズムや、お座なりの取り扱いを決してしないようにと厳しく教えた。」⁽⁴³⁾

明世先生の『暦』ノートはアルウィン先生の厳しい指導に従って1年間の暦を手作りするための細案として作成されたものであろう。明世先生のノートの暦はB5判の用紙に4月から翌年の3月まで、8月は夏休みのため作成されず、11枚の暦がカラー（色鉛筆）で描かれている。（図2）

4月の暦は、桜の花の風景である。中央縦8cm、横11.7cmの枠の中に、大きな桜の木を3人の男児と4人の女児が手をつないで取り巻いている風景が描かれている。周囲には園舎や、菫、タンポポ、つくしが描かれ、遠くに山々も見える。その中央の枠の絵を縦10.5cm、横14cmの枠が取り囲み、この外側の枠は30の方形に分かれ、その30の方形全てに一輪の桜の花の図柄（イラスト）が描かれている。即ち桜の木を取り巻く子どもたちの光景が描かれている中の絵を桜の花30個が取り囲んでいる構図となっている。この構図の下に、「毎日同じものを貼る 毎日…（桜の花の図柄）さくら」と記されているので、毎朝行われる会集の中で暦を扱う時間に1日1個の桜の花の切りぬきを周りの方形の中に貼っていくことがわかる。ノートの4月の暦は周りの方形が30個の桜の花の図柄で埋め尽くされているので、4月は30日、日にちがあったことを知らせている

5月の暦の中央の絵はこいのぼりを見て万歳をしている男児と女児が描かれている。周囲に貼るものは「日曜だけかえる」「毎日 しょうぶの花、日曜 かぶと」と記され、しょうぶの花と（紙で折った）かぶとが図で示されている。平日にはしょうぶの花の切り抜きを貼り、日曜日の印としてかぶとを貼るのであろう。以下中央の絵はその月を象徴する風景が描かれ、周囲に「貼るもの」は図柄と文字で示されている。ここでは枠の中の絵の風景を簡略化して述べ、「貼るもの」は図を省略し文字のみで記す。

6月、雨の日の風景（傘を差した女児とレインコートを着た女児、共に長靴をはいている。あじさい、燕）。貼るもの「日曜日と土曜日をかえる 毎日 赤いばらの花 土曜日 ピンクのばらの花 日曜日 黄色のばらの花」

7月、遊園地の風景（子どもたちを乗せて池に滑りこむボート、それを見ている数人の

子どもたち、空中で回転する4機の飛行機)。貼るもの「晴雨をとりかえる 晴…黄色の帽子 雨…赤い帽子」

9月、十五夜の風景（満月を見ている子どもたち。テーブルの上にはお団子、ススキ、柿）。貼るもの「日曜日を別にして晴雨の別を入れる 晴…橙色の柿 雨…青色の柿 日曜日…栗」

10月、秋の遠足の風景（リュックサックを背負い水筒を肩からかけて友達と話をしている子どもたち。もみじの木、遠くに紅葉した山々）。貼るもの「一週間づゝ同じものを貼り毎週変へる 第一週…つた 第二週…いちょう 第三週…どんぐり 第四週…もみぢ 第五週…きのこ 第六週…からすうり」

11月、果物屋の店先の風景（果物を買いに来た母と2人の女兒。店の主人、たくさん並んだ秋の果物、果物かご、はかり）。貼るもの「一週間づゝ違い日曜日だけ一定にする 第一週…赤いりんご 第二週…緑のりんご 第三週…廿世紀なし 第四週…長十郎なし 第五週…みかん 日曜日…かご」

12月、クリスマスツリーを飾っている子どもたちの風景（大きなクリスマスツリーに椅子に乗って背伸びをしながらベルをつけようとしている女兒、星の飾りを差し出している弟、床の上のまり見ている小さな妹、ソファに腰かけて見守る祖母）。貼るもの「一週刊づゝ違い

土曜日、日曜日を一定にする 第一週…くつ下 第二週…かね 第三週…お人形 第四週…お土産の箱 第五週…まり 日曜日…星 土曜日…ろーそく」

1月、お正月の遊びをしている子どもたちの風景（家の前に門松、日の丸の旗、羽根つきをしている2人の女兒、風揚げ、コマ回しをしている男児）。貼るもの「一週間づゝ違い晴雨をかえる 第一週…晴奴風…雨青い丸 第二週…晴羽子板…雨緑丸 第三週…晴はね…雨紫丸 第四週…晴たけ…雨黄丸 第五週…晴こま…雨赤丸 第六週…晴まつ…雨橙丸」

2月、雪遊びをしている子どもたちの風景（雪だるま作り、雪ウサギ、スキー）。貼るもの「曜日を定めて毎日違ったものを貼る 日曜…赤丸 月曜…ゆきだるま 火曜…うめの花 水曜…ながぐつ 木曜…ゆきうさぎ 金曜…シャベル 土曜…ぼうし」

3月、ひな祭りの風景（ひな壇の前に座っている2人の女兒と立っている男児）。貼るもの「曜日を定めて毎日変ったものを貼り 晴雨をかえる 日曜…晴赤い洋服のお人形…雨青い洋服のお人形 月曜…晴桃色の桃の花…雨青い桃の花 火曜…晴桃色のリボンのつづら…雨青いリボンのつづら 水曜…晴黄色いあられ…雨青いあられ 木曜…晴黄色いせんす…雨青いせんす 金曜…晴赤いぼんぼり…雨青いぼんぼり 土曜…晴赤いつづみ…雨青いつづみ

以上、『暦』ノートを見ると、中央の絵は4月は桜の木をとり巻いている子どもたち、5月はこいのぼりを見上げる子どもたちなど、その月にふさわしい風景と子どもたちの様子が描かれている。周りに「貼るもの」はその月や季節と連動しているものが取り上げられている。明世先生によれば、アルウィン先生は子どもの姿を描くときは、必ず全身を描くようにと指導されたという。4月の暦は30日間同じ図柄が貼ってあるが、月が進むにつれて曜日によって図柄を変えたり、晴雨によって図柄の色を変えたり、週別に異なる図柄にしたりと、週の日数や曜日などがわかり易いように徐々に貼るものが多種類になり、複雑になっている。これぞアルウィン先生の子どもの発達を考え「季節感と合致した題材で子どもの喜ぶもの、興味あるものを使って毎日毎日新しい感じで暦と相對するようにマンネリズムや、お座なりの取り扱いは決してしないようにとの教え」であろう。明世先生の学びの深さがよくわかる。

3. 松下明世先生の保育教材としての暦（カレンダー）の作成とその指導

アルウィン先生から「暦は子どもの時の観念や、数の観念の発達のためのものであるから子どもの」発達段階に合わせ、また「園のカリキュラムにも合わせて製作」しなければならないことを学んだ明世先生は、まず栃木幼稚園において子どもたちと共に暦を作成し会集（朝の会）に取り入れる。ここでは暦をどのように作成し保育の中に取り入れたのか主に明世先生の令和7（2025）年10月21日の回想から探ってみたい。以下は明世先生からお聞きしたことをまとめたものである。

暦の指導は朝の会集の時間に行った。昭和30（1955）年代には栃木幼稚園でも若葉幼稚園でも教師は朝の集会を「朝の会集」と言っていたという。

（1）松下明世先生の暦の作成

暦を導入するためには、どのように子どもたちに興味を持たせ関わせるかを考えて、暦を準備しなければならない。

『暦』ノートにあるように暦は中央にその月にふさわしい絵を描きその周囲をその月の日数の方形が取り囲む形にする。暦は模造紙を使用、1か月に1枚の暦（カレンダー）を作成する。暦の中の絵は新聞紙大の大きさで、絵本などを参考にして教師が描いた。アルウィン先生がおっしゃっていたように絵の巧拙は問題ではなく「担任の先生が作った」ということが重要で、子どもたちは暦に親しんでその月をよく理解し、子どもたちとの信頼関係も深まるのである。中の絵は子どもたちの年齢に合わせその月や季節にふさわしい一目瞭

然の風景を絵本などを参考にして描く。1日1個貼るものも中の絵に合わせ季節や月にふさわしいもの、4月は桜の花や花びら、5月は折り紙の兜やこいのぼりなどを作る。月や学年が進むにつれて曜日や晴雨、週によって変えたり毎日違う図柄にしたり、子どもたちが楽しくなり興味を持つものを折ったり切り抜いたりして作成する。(『暦』ノート参照のこと)

4月、5月頃は年少児はまだ暦に慣れていないので、暦の中の絵も教師が描き、貼るものも用意した。6月頃になると、また年長児になると子どもたちも慣れてくるので、暦の中の絵も子どもたちに「やってみて」と言って子どもに描かせたり、子どもたちと相談して決めたり、貼るものも子どもたちが折り紙で折ったもの、或いは切り抜いたものなどを貼るようになった。年長になると子どもたちが、絵を選び、貼るものもグループごとに友達と相談して決めて作ることができるようになり、子どもたちは自由遊びの時間などに作っていた。

暦は人間が発達し社会生活を営む上で欠くことができない概念である。多忙の中で園のカリキュラムに沿って、また子どもたちの発達を考慮して暦を作成することは大変であった。暦の意義を理解し朝の会に取り入れた他の教師もいたが、アルウィン先生のようにその意義を他の教師にうまく伝えることができず、暦の指導は園の全ての教師には浸透しなかった。

(2) 松下明世先生の暦の指導法

暦は朝の会集(朝の会)の時間に取り入れた。暦の指導は朝の1日の始まりの新鮮な時間に行うことが肝要である。会集の時間は主活動に入る前のおよそ20分間、子どもたちにとって自分たちが帰属する保育室に集まって、担任や友達と挨拶を交わし、一緒に歌を歌いダンスをし、暦に関係する季節や行事の話や、注意事項などを聞いて興味や関心を広げ、期待をもって今日1日を過ごすための時間である。

朝の会集の時間に子どもたちに興味を抱かせ暦を理解させるためには根気と工夫が必要である。

今月の暦(カレンダー)は黒板に掲示しておく。暦の指導に入る前に、或は指導のあとで暦に関心を持たせるために今日の日にちや季節に関係する「お話」をする。例えば通勤途中で見た草花や木々の生長の話、祝日の趣旨、季節の行事や注意事項などである。

当番の子ども2人が前に出る。2人の当番の役割も2人に決めさせる。1人は今日貼るものを上手に貼る係、貼る位置は毎月「ついたち」が暦の左の角の方形の中、「ふつか」は「ついたち」に貼った上の方形の中に「みっか」は「ふつか」に貼った上の方形の中に貼り、1

か月で中の絵の周囲の方形が埋まり、その月の日数がわかる。年少児の暦は貼る位置を教師が印をつけておく。

もう1人の当番は指示棒でカレンダーの日にちを指し、呼称していく係で、呼称は毎日1日から数え皆で唱和する。今日の暦（日にち）は黒板に「元号、年、月、日、曜日、天気」と書いておき子どもたちに確認して書き込む。暦は学期や季節、子どもたちの年齢に合わせて理解し易いように覚えやすいように工夫して指導しなければならない。年長になると暦に慣れ遊びながら覚えるので楽しくなり、暦に進んで取り組むようになる。

暦の日にちは順序を表す序数詞で、1（いち）、2（に）、3（さん）などの基数詞と異なることを理解させる。月の第1日の日である1日（ついたち）から10番目の日である10日（とおか）までの呼称は「にち」が付かず、11日からは「にち」が付くが14日（じゅうよっか）は付かない。15日から19日は「にち」が付き、そして20日（はつか）がやって来る。30日と31日の月もあり、2月は28日で終わり、うるう年の月もある。日本の暦を分析してみると複雑で、「普段大人が言っている言い方、ついたち、ふつか、みっか・・・」等を理解し覚えるのは年少児にとっては難しい。毎日繰り返し歌のようにしてリズムにすると子どもたちは覚え易いが、1日から10日までの数え方のリズムと11日からのリズムが異なり、19日の次に20日（はつか）が来るので、年少児はつかえることが多い。手や足で拍子をとったり、「今日はアリさんになってやりましょう」などと昆虫に例えて数えたり、遊びにつなげ、教師がうまく声を掛け楽しく数えることが大切である。1週間の日数は7日であるが、「ついたち」が第1週の月曜日であるとは限らない。1か月が終わると周りの方角が埋まるのでその月の日数や曜日などを視覚的に理解することができる。子どもたちが、月、週、日にち、曜日を理解し日常使えるようにするためには楽しいことに結び付け反復と励ましが必要である。月日が経つと子どもたちはいつのまにか日付けの呼称や数え方、1週間、1か月の日数を理解し暦を身につけ、1週間後、1か月後にやって来る遠足や誕生会などの行事の日にちがわかり、「これから台風がやって来る」などと自然現象の到来の日を予想することもできるようになる。毎年3月になると前年4月からの1年間の暦を保育室に掲示する。子どもたちは喜び教師や友達と一緒に過ごした1年間を視覚的に理解し期待をもって4月に進むのである。

明世先生は、「アルウィン先生は余命を悟って、厳しく指導してくださったのでは」とその指導の厳しさの由来を推測しているが、幼稚園の現場においても暦の教材研究や指導はかなり労力を要したという。そして次のような話をしてくださった。

ある時銀行の前で「栃木幼稚園の園長先生ですか」と声をかけられた。「そうです。」と

応えると「うちの孫は今高校生になるが、幼稚園で暦のことを教えていただいたので小学校に上がっても苦労しませんでした。未だに孫は幼稚園で暦を習ったことを覚えています。教えていただいて本当に有難うございました」と言われた。暦を保育に取り入れた直後、「こんなことをやるのか」と批判的な保育関係者もいたが、暦を保育に取り入れて良かったと思っている。

栃木幼稚園・若葉幼稚園では、現在でも各保育室に担任の教師と子どもたちが工夫して作成した暦が掲示され、朝の集まりの時間に今日の日にち、令和7年、何月、何日、何曜日、天気、温度、湿度などが確認され、暦に関するお話がなされている。

おわりに

筆者らは、前稿「学校法人耀光学園理事長、栃木幼稚園園長松下明世先生の半生と『童心拝育』の保育の実践」（『國學院大學栃木短期大學紀要』第59号、2025年3月）を執筆させていただき、明世先生の偉大さを改めて実感させていただいた。その後、栃木幼稚園に何度かお伺いしてアルウィン先生からの学びについてお話をお聞きするたびに、明世先生はアルウィン先生を深く慕い生涯の師とされていることを理解した。明世先生は昭和29（1954）年4月に玉成高等保育学校に入学され、アルウィン先生から直接指導を受けたのは、たった1年であった。しかし、その深い学びは、教育の神髄として記録に留めておくべき貴重な内容であると思われる。明世先生は70年前に玉成高等保育学校で学ばれた時の『教育課程』ノートと『暦』ノートを保管されている。そこで本稿では明世先生の学びの一端である『教育課程』ノートと『暦』ノートを手掛かりにして、明世先生が恩物や暦についてどのように学ばれて保育教材として取り入れたのかを考察した。明世先生は恩物についても暦についてもアルウィン先生から徹底的に厳しい指導を受け、恩物の法則や暦の意義について深く学ばれ、自己の保育実践に取り入れ、子どもたちや教師たちにも指導されている。このことは今日の明世先生の子どもたちに対する言動や栃木幼稚園、若葉幼稚園の教育方針、そして教師たちの子ども観、保育観や保育方法に良く現れている。

令和7（2025）年11月4日に、栃木幼稚園の保護者の保育参観を見学させていただく機会を得た。そこで実際に年長組の朝の会での暦の指導について見学させていただいた。10月と11月の教師手作りの画用紙大の暦が黒板の右下に掲示されていた。（図6）10月の暦の中の図柄は大きなさつまいもが3本、土から伸びている茎、葉脈がよくわかる葉の光景、周りには週ごとに赤、青などの異なった色のシールが、休日は金色のシールが貼られていた。11月の暦は落ち葉で作成したフクロウが2羽、周囲には何も貼られていない。11月4日が

11月最初の登園日であったからである。ワッペンをつけた今日のリーダー4人が前に出て朝の会が始まった。10月と11月の暦が黒板の中央に移され、教師は10月の暦と11月の暦に触れ、11月は「オータム、オータム」の季節となり、子どもたちと相談して1週目はドングリの切り抜き、2週目はイチョウの葉の切り抜き、休日はもみじの切り抜きを貼ることになった。そして今日は「令和7年11月4日火曜日、天気は晴れ、気温は17度で湿度は52パーセント」であることが確認され、リーダーによってイチョウの切り抜きが貼られた。

年中児の保育室には、フレーベルの中心模様を土台としたこどもたちの製作物が掲示されていた。年中組の担任教師に話を伺うと、明世先生からご指導をいただきながら、製作に取り組んだとのことであった。(図7)

これまで明世先生に接し、先生は豊かな感性と鋭い観察眼、研究心を持たれ、木々の葉や草花などの自然物をご覧になるとすぐにこれらをどのように保育教材にするか考えておられることがわかった。子どもたちには本物に触れさせて観察させることが大切であることを常に教師たちに指導されていた。春、筆者らが幼稚園訪問を終えて帰ろうとしたとき、てんとう虫が目の前に飛んできた。すると、明世先生はすぐにそのてんとう虫を捕まえて、年長組の担任教師を呼んで手渡した。明世先生は幼稚園への通勤途中でも、道に落ちている落ち葉を拾ってくるという。同じ種類の葉でも、裏表で異なる色、形、葉脈などが目に入ってくると仰しゃる。明世先生は新聞紙や広告などのたくさんの切り抜きを見せてくださった。(図8) デザインや色彩の素晴らしいものを常に切り取って、必要な教師たちに渡しているという。

そこには、常に子どもたちのためにと、良い教材を探し求め、そして教師に適切な指導を続けられている明世先生の姿があり、その姿に感動する。

本稿に記したことは松下明世先生の人間観、子ども観、幼稚園育観の形成とその実践のほんの一部でしかない。明世先生から学ばせていただくべきことは未だ多く残されているので、今後の課題とさせていただきます。

松下明世先生に出会え、その学びや実践の一端に触れる機会を得たことはこの上なく幸甚なことであり、松下明世先生をはじめ学校法人耀光学園の皆様に衷心より感謝申し上げます。

注

(1) 日本保育学会『日本幼児保育史第三巻』フレーベル館 1973年再版 250頁

(2) 前掲書 218～219頁

(3) 伝記編集委員会編『荒野に水は湧きて一ペラ・アルウィンの生涯―』学校法人アルウィン学園

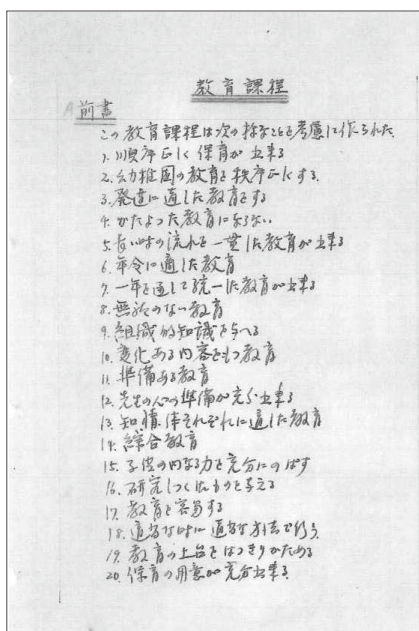
1980 年 303 頁

- (4) 松下明世先生はアルウィンから厳しい指導を受けてお話や童話を作成されている。前稿「学校法人耀光学園理事長、栃木幼稚園園長松下明世先生の半生と『童心拝育』の保育の実践」(『國學院大學栃木短期大學紀要第 59 号』2025 年 3 月所収) 76 ～ 77 頁参照のこと。
- (5) 岩崎次男『フレーベル教育学の研究』玉川大学出版部 1999 年 592・624・626 頁
- (6) 荘司雅子『フレーベルの教育学』フレーベル館 1955 年 232 頁
- (7) 前掲書 233 頁
- (8) 岩波書店編集部編『岩波西洋人名辞典増補版』岩波書店 1982 年 1272 頁
- (9) 岩崎次男『フレーベルの教育学』玉川大学出版部 1999 年 119 頁
- (10) 前掲書 730 頁
- (11) 関信三訳述『幼稚園記』東京女子師範学校 1876 年 9 丁表
- (12) 関信三纂輯『幼稚園法二十遊嬉』青山堂 1879 年 5 丁表
- (13) 簡野道明著『増補字源』角川書店 1955 年 増補初版 654 頁。荘司泰弘氏によれば、関信三はフレーベルの「遊具」を「恩恵により、仏や父母から賜った物」という意味合いで「恩物」「賜物」と意訳した(玉成恩物研究会編『フレーベルの恩物で遊ぼう』「序文」フレーベル館 2000 年)。関信三(1848 ～ 1880)は僧名猶龍、別名安藤劉太郎と言い、東本願寺派の僧侶であった。明治 2 (1869)年に耶蘇教を探索する謀者となり、明治 5 (1872)年に東本願寺現如上人の欧州視察旅行に同行、明治 6 (1873)年、現如上人一行と別れて欧州に学び、明治 8 (1875)年に帰国し、東京女子師範学校の英語教師になったのである。
- (14) 関信三纂輯『幼稚園法二十遊嬉』青山堂 1879 年 5 丁裏～ 6 丁表
- (15) 文部省『幼稚園教育百年史』ひかりのくに株式会社 1979 年 66 頁
- (16) 前掲書所収(豊田扶雄述「保育の栞」1879 年) 912 頁
- (17) 『栃木幼稚園規則』「昭和二年改訂」 認定こども園栃木幼稚園 所蔵
- (18) 岩崎次男『フレーベル教育学の研究』628 ～ 629 頁
- (19) 玉成高等保育学校では、第九恩物は「金属製の全環及び半環、四分の一環… (第二恩物木製の球と同じもの)」第十恩物は「豆または小石による粒体」としている(『フレーベルの恩物の理論とその実際』11 頁)。岩崎次男氏は、第三恩物から第八恩物までが「第二恩物の立方体の分割からつくられる積木で構成され」それらは「遊びの恩物」と称される。第九恩物以下は「作業具」と称され、第九恩物は、正方形・直角二等辺三角形・正三角形・直角不等辺三角形などの板、第十恩物は小箸、第十一恩物は点をあらわす種子、小石、小さな葉、紙片など、第十二恩物は刺し紙冊子、第十三恩物以下はやわらかくされたえんどう豆、粘土、馬鈴薯等々である(岩崎次男『フレーベル教育学の研究』595 頁。梅根悟監修『幼児教育史 I (世界教育史体系 21)』講談社 1974 年 243 頁)
- (20) 岩崎次男『フレーベル教育学の研究』574 頁
- (21) 伝記編集委員会編『荒野に水は湧きてーベラ・アルウィンの生涯ー』学校法人アルウィン学園 1980 年 298 頁。アルウィンは「十一穴をあける」から「十二縫う」に進む途中の段階として「附則 A 自然物つなぎ」「附則 B 三体つなぎ」を取り入れたという(アルウィン学園玉成高等保育学校幼児教育学研究会編『フレーベルの恩物(手技・工作編)』33 頁)。「三体つなぎ」とはフレーベルの信奉者ドイツのハイルマンが考案したフレーベルの第二恩物「球・立方体・円柱」の 3 形態を小形(縮小)化した木製の教育玩具で、6 色に着色され、穴が開いてる。子どもたちは 3 体の色や

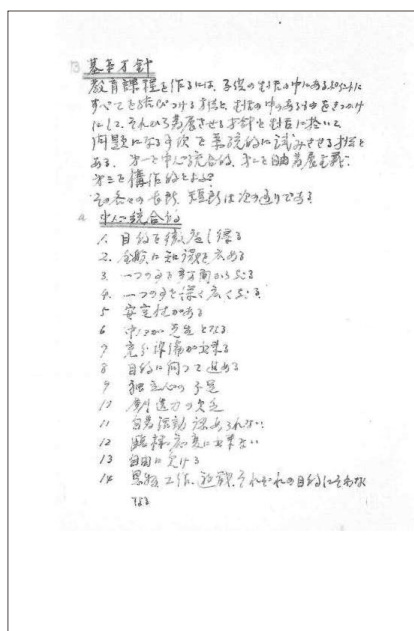
形を自由に組み合わせて革紐でつないでいくのである。(同前 37 頁)

- (22) 前掲書 297 頁
- (23) 武政太郎監修・有院遍良校閲『フレーベルの恩物の理論とその実際』玉成高等保育学校幼児保育研究会編。ここでは玉成保育専門学校編、1964 年 9 月初版、1979 年 6 月 17 版を使用、10 頁
- (24) 伝記編集委員会編『荒野に水は湧きてーベラ・アルウィンの生涯ー』学校法人アルウィン学園 1980 年 298 頁。第三恩物は「一稜三糧の木製小立方体八個が集合せる六糧立方体入り一箱」である(『フレーベルの恩物の理論とその実際』11 頁)。
- (25) 『フレーベルの恩物の理論とその実際』には恩物の取り扱いについて「注意」書きがなされている箇所がある。例えば第三恩物の「全体の注意」として次のように記されている。「イ、大切に取り扱い合わせる。ロ、箱からだすときは、順序正しくださせる。ハ、箱からだすとき、くずれないよう注意する。ニ、積木を空中で示したり、用いたりしない、ホ、先生の言葉は明瞭に、またあまりむずかしすぎないように注意する。ヘ、すべてが模倣に終わらないようにする。ト、積木は、だしたら必ず子どもにしまわせる。チ、八個の小立方体は、常に全部もちいなければならない。」(117 頁)
- (26) 「園長講話・座談会」(國學院大學栃木短期大學初等教育学科『教育研修の記録』第 19 輯 1986 年所収) 31 ～ 32 頁
- (27) 岩崎次男『フレーベル教育学の研究』737 ～ 738 頁
- (28) 莊司雅子『フレーベルの教育学』51 ～ 52 頁
- (29) 前掲書 108 頁
- (30) 岩崎次男『フレーベル教育学の研究』120 頁
- (31) 前掲書 736 頁
- (32) 梅根悟監修『幼児教育史 I (世界教育史体系 21)』講談社 1974 年 242・243 頁。岩崎次男『フレーベル教育学の研究』595 頁
- (33) 伝記編集委員会編『荒野に水は湧きてーベラ・アルウィンの生涯ー』学校法人アルウィン学園 1980 年 318 頁
- (34) 前掲書 303 頁
- (35) 同前 303 ～ 304 頁
- (36) 日本保育学会『日本幼児保育史第一巻』フレーベル館 1968 年 3 版 95 ～ 96 頁
- (37) 前掲書 97 ～ 100 頁
- (38) 同前 97 頁
- (39) 伝記編集委員会編『荒野に水は湧きてーベラ・アルウィンの生涯ー』学校法人アルウィン学園 1980 年 306 頁
- (40) 『百科事典マイペディア・日立電子辞書版』。「日本語の『こよみ』は日を数える意である。長い時の流れを数える法が暦である。これに対して漢字の『暦』が意味するのは、日月星辰の運行を測算して、歳時、時令などを日を追って記した記録である。/ 和漢いずれも時を数える方法が暦法である。この暦法によって推算して将来予知される公の時令を記したものが暦書である。暦にはこの二つの意味がある。」(編集著作出版者相賀徹夫『日本大百科全書 9』小学館 1986 年 597 頁
- (41) 伝記編集委員会編『荒野に水は湧きてーベラ・アルウィン生涯ー』321 頁
- (42) 前掲書 320 ～ 321 頁
- (43) 同前 325 頁

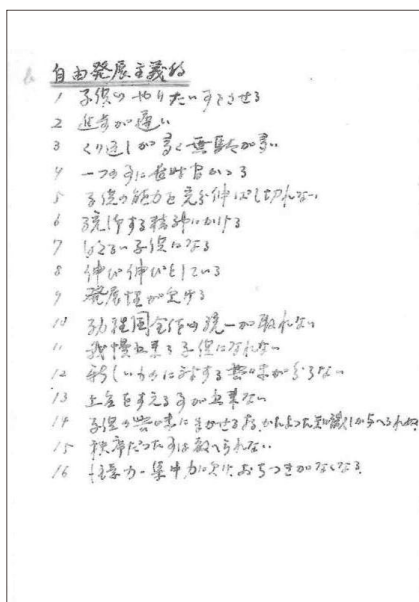
図1 『教育課程（昭和30年度）』 ノート



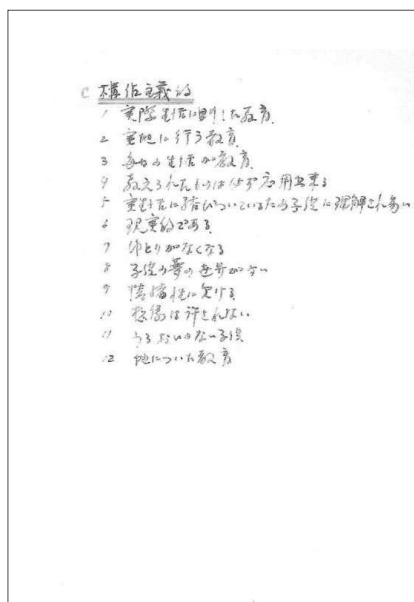
教育課程 前書き



基本方針、中心統合の



自由発展主義の



構作主義の

図1『教育課程（昭和30年度）』ノート

昭和30年度
（案）昭和30年度月案
年案 学期案 月案

年案	学期案	月案	目的	主 要	利 害
	第一学期	四月	遊び	毎日	園児の健康
	第二学期	五月	遊び	毎日	園児の健康
	第三学期	六月	遊び	毎日	園児の健康
	四月	遊び	遊び	毎日	園児の健康
	五月	遊び	遊び	毎日	園児の健康
	六月	遊び	遊び	毎日	園児の健康
	七月	遊び	遊び	毎日	園児の健康
	八月	遊び	遊び	毎日	園児の健康
	九月	遊び	遊び	毎日	園児の健康
	十月	遊び	遊び	毎日	園児の健康
	十一月	遊び	遊び	毎日	園児の健康
	十二月	遊び	遊び	毎日	園児の健康
	一月	遊び	遊び	毎日	園児の健康
	二月	遊び	遊び	毎日	園児の健康
	三月	遊び	遊び	毎日	園児の健康

年案、学期案、月案

週 案

日 期	目 的	主 要	利 害
四月	第一週	遊び	遊び
第二週	遊び	遊び	遊び
第三週	遊び	遊び	遊び
第四週	遊び	遊び	遊び
五月	第一週	遊び	遊び
第二週	遊び	遊び	遊び
第三週	遊び	遊び	遊び
第四週	遊び	遊び	遊び
六月	第一週	遊び	遊び
第二週	遊び	遊び	遊び
第三週	遊び	遊び	遊び
第四週	遊び	遊び	遊び
七月	第一週	遊び	遊び
第二週	遊び	遊び	遊び
第三週	遊び	遊び	遊び
第四週	遊び	遊び	遊び

週案 四月～七月

日 案
四月第二週

会 集	場 所	工 作	遊 戯
小 組	第一色赤	自由画	遊び
中 組	第二色黄	自由画	遊び
大 組	第三色青	自由画	遊び
小 組	第四色黒	自由画	遊び
中 組	第五色白	自由画	遊び
大 組	第六色紫	自由画	遊び
小 組	第七色緑	自由画	遊び
中 組	第八色橙	自由画	遊び
大 組	第九色灰	自由画	遊び
小 組	第十色金	自由画	遊び
中 組	第十一色銀	自由画	遊び
大 組	第十二色黒	自由画	遊び

日案 四月第二週

五時間保育
日 案

目 的	主 要	利 害
9時	遊び	遊び
10時	遊び	遊び
11時	遊び	遊び
12時	遊び	遊び
13時	遊び	遊び
14時	遊び	遊び
15時	遊び	遊び
16時	遊び	遊び
17時	遊び	遊び
18時	遊び	遊び
19時	遊び	遊び
20時	遊び	遊び
21時	遊び	遊び
22時	遊び	遊び
23時	遊び	遊び
24時	遊び	遊び

時間割 五時間保育

図1『教育課程（昭和30年度）』ノート

幼稚園保育様式

週 月 日 時限 保育者氏名

区分 別に定め教育課程に於てその日の保育時限に定むる事
 予定 凡の事項について記載す

1. 幼稚園 登園準備
 a. 保育室の周りに
 b. 遊園地の遊具の周りに
 共に注意すべき事を記す

2. 保育時間中の事項
 a. 自由保育
 準備多岐諸事項 観察すべき事項を記す
 b. 共同生活
 題目指導目標準備等入った詳細に記録を備へ
 c. 食事
 食事及び食生活の食生活に於ける準備観察と整
 頓に關する記載
 3. 幼児退園後の整理
 a. 当日保育の状況日記に記載する
 観察事項の要項並に幼児個性に關する記載
 b. 保育室遊園遊具の整理
 靴の整理

幼稚園保育様式

幼稚園会集案様式

週 月 日 時限 保育者氏名

題目
 指導目標 特に注意すべき事項
 準備 室の設備及び様式(絵画室物標等)
 予定

1. 導入
 a. 会集すべき室の準備
 b. 幼児座席の配列法

2. 指導の実施
 a. 会集事項
 会集の順序及び所要する時間(20分)
 特に注意すべき事項及び同室の幼児
 及び絵画室物標準備等使用すべき物
 材を記す
 b. 会集後の幼児の観察

幼稚園会集案様式

幼稚園手技保育案様式

(複数製作の場合)

週 月 日 時限

題目
 指導目標 製作の目的と主要事項
 準備

一 製作に用いる材料又は材料用具の用意
 一 直観物の用意
 資料、絵画、模型、製作品等

予定

I. 導入
 a. 幼児座席の配列法
 b. 製作の準備事項
 製作品に於ける興味と必要事項
 直観物の観察目的材料又は材料用具の配列

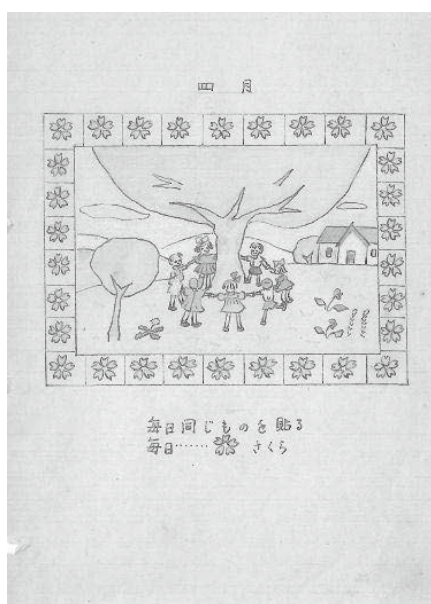
II. 指導の実施
 a. 示範の実際
 1. 製作は適宜の段階に分けて示し、一歩一歩に
 実習せしむ
 但し所定は製作の適合性の一歩一歩
 を示して指導せしむ
 2. 会集時の指導法
 共同観察に於ける幼児の製作を観望し、所
 定に於て指導せしむ

幼稚園手技保育案様式

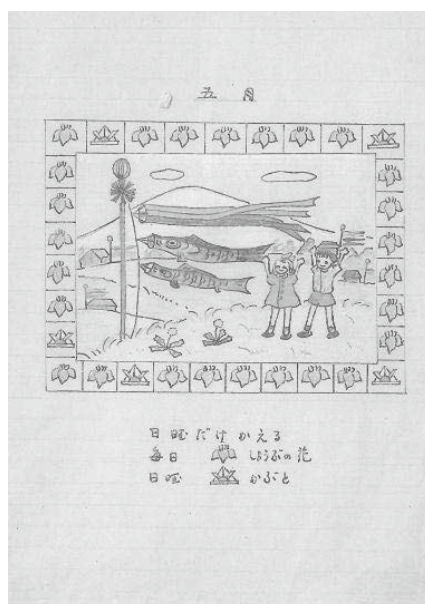
III. 整理
 a. 製作用具等の整理
 b. 製作品の処置法
 (製作品は必ずこの所にあつた)
 製作品を整理し、又感得作品と観察と
 に適当に
 上段に示すのと又は下段に示すのと
 幼児に任す

幼稚園手技保育案様式

図2 松下明世先生作成の「暦（昭和30年度）」ノート



四月



五月

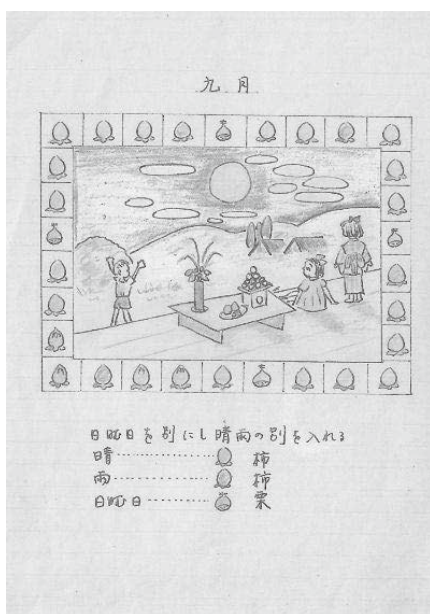


六月

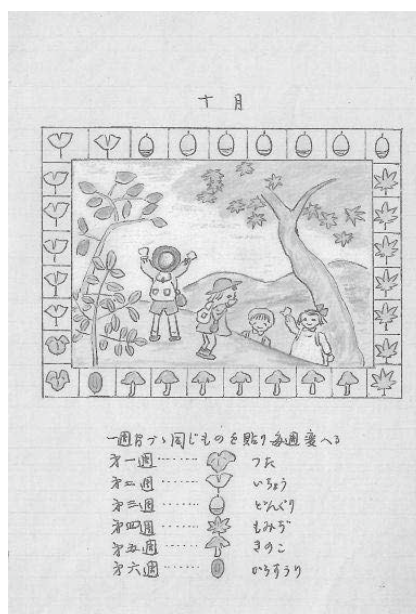


七月

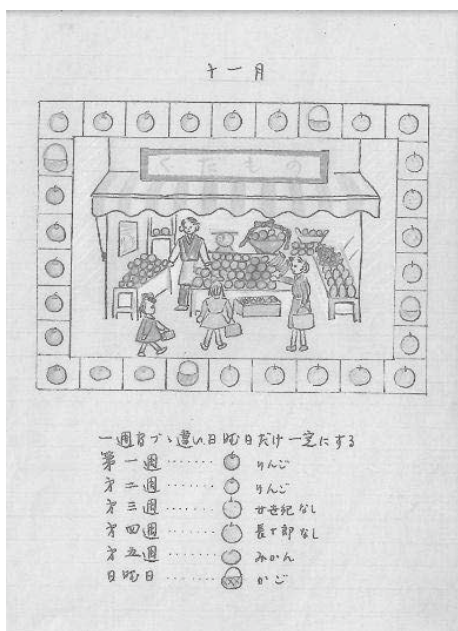
図2 松下明世先生作成の「暦（昭和 30 年度）」ノート



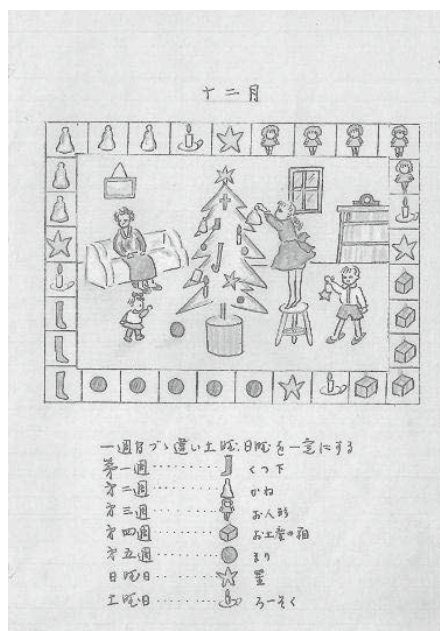
九月



十月

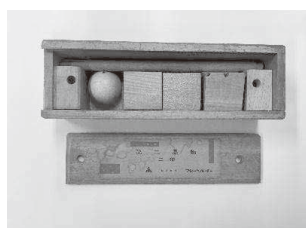


十一月

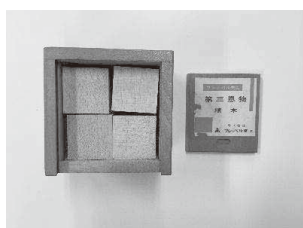


十二月

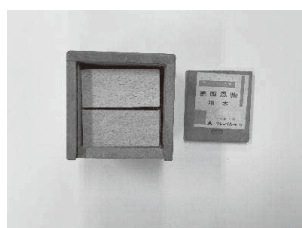
図3 恩物（栃木幼稚園所蔵の一部）



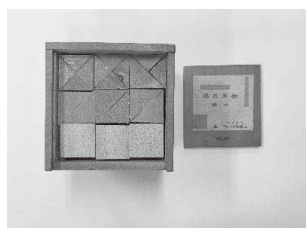
第二恩物 三体
(フレーベル館製)



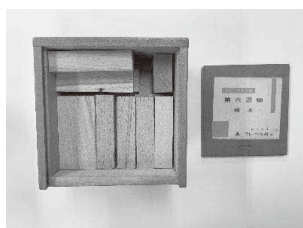
第三恩物 積木
(フレーベル館製)



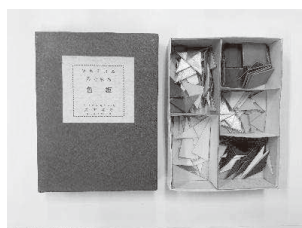
第四恩物 積木
(フレーベル館製)



第五恩物 積木
(フレーベル館製)



第六恩物 積木
(フレーベル館製)

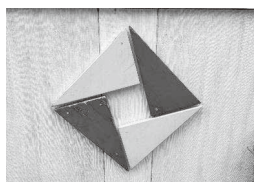


第七恩物 色板
(黒田謹製)

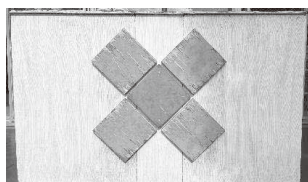
図4 若葉幼稚園 靴箱の中心模様



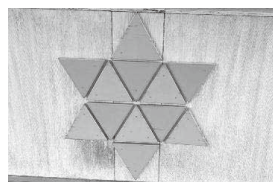
若葉幼稚園 園庭側の3つの靴箱の中心模様



靴箱の中心模様1

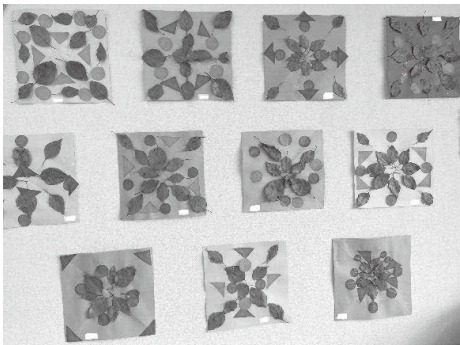


靴箱の中心模様2



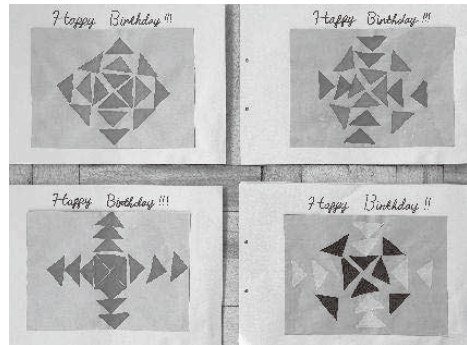
靴箱の中心模様3

図5 フレーベルの中心模様



令和6年度 年長児製作

図7 フレーベルの中心模様



令和7年度 年中児製作

図6 「暦」



令和7年10月、11月年長クラスの暦

図8 松下明世先生



教材収集をする明世先生